# 青鞜

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年九月一日發行 第一巻第一號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 青鞜

四十四年九月一日
第一巻第一號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 青鞜第一巻第一號内容


そゞろごと（詩）……一…與謝野晶子
死の家（小説）……一〇…森しげ女
百日紅（俳句）……二〇…白雨
生血（小説）……三一…田村とし子
元始女性は太陽であつた（感想）…三七…らいてう
猫の蚤（小品）……五二…國木田治子
影（散文詩、飜譯）……五七…ポオ
陽神の戯れ（戯曲）……六三…荒木郁子
磯のひろ（短歌）……八〇…淑子
七夕の夜（小説）……九三…物集和子
ヘッダガブラ論（飜譯）……一一〇…メレジユウスキー
表紙繪……長沼智惠子


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# そぞろごと

與謝野晶子

○

山の動く日來る、
かく云へども人われを信ぜじ。
山は姑く眠りしのみ。
その昔に於て
山は皆火に燃えて動きしものを、
されど、そは信ぜずともよし。
人よ、ああ、唯これを信ぜよ。

すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる。

○

一人稱にてのみ物書かばや。
われは女ぞ。
一人稱にてのみ物書かばや。
われは。われは。

○

額にも肩にも
わが髪ぞほつるる。
しをたれて湯瀧に打たるるこころもち。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほとつくため息は火の如く且つ狂ほし。
かかること知らぬ男、
われを褒め、やがてまた譏るらん。

○

われは愛づ。新しき薄手の玻璃の鉢を。
水もこれに湛ふれば涙と流れ。
花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。
愁ふるは、若し粗忽なる男の手に砕け去らば。——
素燒の土器より更に脆く、かよわく。

○



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青く、且つ白く、
剃刀の刄のこころよきかな。
暑き草いきれにきりぎりす啼き、
ハモニカを近所の下宿に吹くは懶けれども。
わが油じみし櫛笥の底をかき探れば、
陸奥紙に包まれし細身の剃刀こそ出づるなれ。

○

にがきか、からきか。煙草の味は。
煙草の味は云ひがたし、
甘しと云はば、かの粗忽者
砂糖の如く甘しとや思はん。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは近頃煙草を喫み習へど、
喫むことを人に秘めぬ。
蔭口に男に似ると云はるるもよし、
唯おそる。かの粗忽者こそいと多なれ。

○

「鞭を忘るな」と
ツアラツストラは云ひけり。
女こそ牛なれ、また羊なれ。
附け足して我は云はまし。
「野に放てよ。」

○



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが祖母の母はわが知らぬ人なれど、
すべてに華奢を好みしとよ
水晶の珠數にも倦き、珊瑚の珠數にも倦き、
この青玉の珠數を爪繰りしとよ。
我はこの青玉の珠數を解して、
貧しさに與ふべき玩具なきまま、
一つ一つ兒等の手に置くなり。

○

わが歌の短ければ
言葉を省くと人おもへり
わが歌に省くべきもの無かりき。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

また何を附け足さん、
わが心は魚ならねば鰓を有たず、
ただ一息にこそ歌ふなれ。

○

すいつちよよ、すいつちよよ。
初秋の小き篳篥を吹くすいつちよよ。
蚊帳にとまれるすいつちよよ。
汝が聲に青き蚊帳は更に青し。
すいつちよよ、なぜに聲をば途切すぞ。
初秋の夜の蚊帳は水銀の如く冷きを、
すいつちよよ、すいつちよよ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

油蟬のじじ、じじと啼くは、
アルボオス石鹸の泡なり、
慳貪なる男の方形に開く大口なり、
手握みの二錢銅貨なり、
近頃の藝術の批評なり、
誇りかに語るかの若き人等の戀なり。

○

夏の夜のどしや降の雨、
わが家は泥田の底となるらん、
柱みな草の如く撓み、



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そを傳ふ雨漏の水は蛇の如し。
寢汗の香、かなしさよ。よわき子の齒ぎしり。
青き蚊帳は蛙の喉の如く脹れ、
肩なる髮は鹿子菜の如く戰ぐ。
この中に青白きわが顏こそ
芥に流れて寄れる月見草なれ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 死の家

森　しげ女

今年の梅雨は例年にまして、雨が多かつた。雨ばかりではない。風さへ加はつて、秋のあらしの様になつて、風をきらふ弓子を、厭がらせた。

久しぶりで今日は、晴々とした、好い天氣になつた。丁度日曜日である。毎朝きまつて六時になると起しに來る小間使の初が、日曜日だけは、弓子の室の雨戸さへ、起き出るまでは開けずに置くのである。

弓子は四疊半の化粧部屋へ這入つて、初の持つて來てくれる一ぱいの桶の湯と水指の水と空虚のバケツとで、朝の身じまひをする。髪を解かしてかなり手數の掛かる庇髪に結つて、歯を磨く。それから西洋お白粉で薄化粧をして、學校行の着物を着て、袴を穿いてしまふまで、凡四十分程は掛かる。今朝は母あ様が亂れ箱の中に入れて置いて下さつた着物を着た。薄青に白上がりで、匹田の青海波を出した友仙絽縮緬の單へに、長襦袢は肉色無



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地縮緬の襟を掛けたクリイムの絽縮緬に着物と同じ模様の友仙てある。帶は白地に銀糸て荒い手綱の出してある、金春式唐織の丸帶である。ぱちんを締めるのに、緩過ぎたり長過ぎたりするのを、幾度も直してゐるうちに、結んだ帶が解けてしまふ。弓子はじれてゐたが、やつとの事て支度は出來上がつた。

茶の間へ出て見ると、自分のお膳が一つ丈出てゐて、初がお給仕に來てゐた。小さい時お父う様に別れて、一人のお兄い樣は今京都の大學に行つてお出でなので、東京の住まひは、母あ樣と二人切りてある。

「わたし一人なの。そんなに遲いかね。今日一日潰すのだと思つて、ゆうべ十二時迄起きて復習をしたもんだから、すつかり寐過したわ。かあ樣は。」

「福島の奥樣がお出になりまして、お二階に入らつしやいます。」

「福島の奥樣。」

弓子は此間中から度々言ひ込んで來る自分の縁談に違ないと思つた。やうやう學校を卒業する迄は、結婚はさせないと、極めて下さつた母あ樣を、又迷はせにお出になつたのか。誰がおよめになんか行くものか。今日見舞に行く筈になつてゐる、鵠沼て死に掛かつてゐるばあやだつて、およめにさへ行かなかつたら、肺病になんかならずに濟んだかも知れない。内に奉公してゐる間は、風を引いたことも稀てあつたぢやないかなどと思ふ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弓子は長年自分を育ててくれた乳母が、丁度七年程前に急によめに行つてしまつたのが、不思議でならない。いつまでもお嬢様のお傍におりますと、口癖のやうに云つてゐた乳母が、俄に人の女房になつて、今迄の倍もある大きな丸髷に結つて、お白粉をこて〳〵塗つたのを見たときは、弓子は子供心に可笑しく思つた。

乳母の夫は結婚後間もなく大阪の郵便局へ赴任した。乳母が泣きの涙で弓子に別れてから、もう七年立つた。長い間來る手紙も〳〵、自分の體の弱くなつたことばかりが書いてあつた。とう〳〵二月程前に、子供を連れて、夫に送られて、鵠沼在の實家へ歸つて來た。安心したせいか、汽車の旅に疲れたのか、めき〳〵病氣が重つた。母あ様がお醫者を賴んで、鵠沼まで診察に行つて貰つたが、肺結核のひどいので、お醫者にも見限られてしまつたのである。

此頃は日々お嬢樣々々とばかり云ひ暮らしてゐる。或る日なんぞは便所へも行かれぬやうになつてゐる體で、どうしても一遍東京まで出て、弓子に逢つて來ると云ひ出して、家中を騷した。そこで乳母の兄がおとつひわざ〳〵弓子の内へ來て、母あ様にその話をしたのを、弓子が聞いて、今日執事の山尾を連れて、九時十分新橋發の汽車で、鵠沼へ行く事になつたのである。

弓子は御飯を濟まして、母あ様の二階から降りて入らつしやるのを、新聞を讀みながら



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

待つてゐた。そのうち八時が過ぎたので、二階へ上がつて行つて、母あ樣に挨拶して出掛けることにした。

弓子の乘り込んだ二等室は、かなり込んでゐた。連れが男なので話もなく、人形の樣におとなしく兩手を膝に載せて、發車を待つてゐた。後れ馳せに、若い一人の紳士が這入つて來て、弓子の眞向ひに腰を掛けた。見るともなしに見合せた紳士の顏は、はち切れさうに肉附いた頰と頰の間に、赤子の口のやうな極く小さい口が附いてゐる。ちよいと見て、弓子は可笑しいと思つた。こんな事が好くあるので、噴き出してはならないと、一しよう懸命我慢してゐる。折々山尾の話し掛けるのに簡單に答へて、只脣を噬んで體に力を入れて我慢してゐる。丁度橫濱へ着いた。二三人連の外國人が立ち上がつて車を出しなに、出し拔に赤い薔薇の花束を弓子の手に渡して行つた。弓子は不意の事で、美しい花に氣を取られて、少し可笑しさが薄らいだ。やれ嬉しいと、はつと息を衝く暇もなく、眞向ひの男は空氣枕をかばんの中から取り出して、息を入れ始めた。空氣枕は段々ふくらむが、頰つぺたは小さくはならない。却てますます〳〵ふくれて來て、今にも枕も頰も一齊にはち切れさうに思はれる。弓子は目を瞑つて見まいと思つたが、幻のやうに空想の畫き出す頰と枕とは、實際より一層ふくらんでゐる。殆ど停止する所を知らない。とう〳〵ぷつと噴き出して、ハンケチで顏を掩つた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

藤澤に着いたのは十一時少し過ぎてあつた。停車場前の茶屋て休んて、弓子は東京から持つて來たサレドヰチッや西洋菓子や果物を取り出して食べて、山尾にも分けて遣つた。結核の病人のゐる所て、物を食べない用心をして、こゝていろんな物を食べたのてある。

そこて車を倩つて、道のてこぼこした田舍道をがた〳〵ゆられて出掛けた。線路を通り越して橫へ曲ると、まだ餘程遠いのに、乳母の家の大きな松の木が見える。弓子は子供の頃兩親に連れられて乳母の家へ來たことがある。松の木の多い鵠沼村ても、此松は優れて大きく高いので、乳母は自慢してゐたのてある。傍に少し背の低いのが二本並んてゐてそれに注連繩が張つてあつた。此の松が元からある、その下へ乳母は、弓子の家を下がる時貰つた一時金と、それ迄の貯金とを合せて、二階建ての家を立てた。その頃乳母の云ふには、不斷は兄に貸して置きますが、海水浴にお出になる時には、婆あやの內へお出下さいと云ふことてあつた。今思へばあの家は乳母が死所に立てた樣なものだ。弓子はさう思ふので、乳母の家へ近寄る心持が、いつか遊びに來た時とは丸て違ふ。

松の木は目の前に見えてゐても、がた〳〵車が乳母の家に着くまてには、かなり時が立つた。最初に弓子を見附けたのは、土間て爲事をしてゐた乳母の母親て、それが飛んて出て來た。そして「好く來て下さいました」を續けざまに言つて、二階建ての乳母の家へ案內した。戶口の內は廣い土間てある。そこへ這入つて覗き込むと、六疊と八疊との下座敷



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

があつて、その奥の方の間に自分の知つてゐた其人とは思はれぬ様に痩せ衰へた乳母がゐた。

乳母は弓子の來るのを知つてゐたか起き上がつてゐた。そして「お嬢様ですか」と云つた切りで、泣いてゐる。それを見ると、弓子の目からも涙が出た。これは全く豫期してゐない涙であつた。けふ死に掛かつてゐる乳母を見舞ふと云ふことは、弓子が爲めに果さなくてはならない義務に過ぎなかつた。そして乳母になんと云はうかと思つて考へるのが苦になつた。泣かれようなんぞとは思はなかつた。その目に涙が出た。弓子は重荷を卸したやうな氣がした。もう別に何も言ふ必要はないのである。

暫くハンケチを顏に當ててゐた弓子は顏を上げて云つた。「ばあやお土產があつてよ。これはかあ樣とわたしとで拵へたのよ。掛けて御覽。」

紫絣の銘仙に、クリイム色の絹の裏を附けた下掛である。それを乳母に着せ掛けて遣つた。

「それからばあやの食べられさうなお菓子を色々持つて來てよ。牛乳の中へ入れる樣にと思つて、ココアもあるのよ。それから婆あやが寢てゐて眺める樣にと思つて、造花を持つて來たの。まだ稽古し立てだから隨分まづいわよ。ほら、つづき狹に菊に桔梗に朝顏に蓮。これで習つた丈みんなよ。」



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お出を願ひました上に、色々頂戴物をいたしましては濟みません。早く直つてお禮に東京のお邸へ伺ひたいと思ひますが。」

十日持つか持たぬかだと、醫者に宣告せられてゐる、窶れ果てた乳母を、弓子はどう慰め様もなかつた。

乳母の枕元には、弓子のかぶきりで被布を着た寫眞が飾つてあつた。その後も庇髮やら高島田やら、幾らも寫眞を送つた筈だが、乳母にはやつぱり自分が手なづけた頃の弓子が戀しいのと見える。弓子の寫眞の隣に六つ許の、目の醒める樣に美しい男の子の寫眞が並べて立ててある。乳母には今年此位の年頃の男の子が出來てゐるのだが、寫眞は乳母の子にしては餘り美し過ぎる樣である。

「この子供は婆あやの子なの。なんといふ好い子だらう。」

「大阪に居りました頃、好く御主人のお子樣と人に間違へられましたが、やつぱりお孃樣を大切にお扱した癖が拔けないと見えると云つて、好く宅でも笑ひました。」

乳母は寂しい笑顏をした。

「子供は連れて來てゐるのね。」

「はい。今しがた母屋の人達が宿へまゐりますのに附いて行きましたが、もう歸る頃でございます。お孃樣がお嫁にいらしやるまでにはあの子が十四になります。それ迄はわたく



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しは石にかぶりついても死にはいたしません。」

乳母の青い顔は薄赤くなつた。そして目が異樣に光つてゐる。詞とそれを言つてゐる人との矛盾とでも云はうか、何か不合理なやうな處のあるのが、弓子には不快に思はれた。

次の間では山尾が乳母の母親に頻に御飯の支度をことわつてゐる。それを聞いて弓子は云つた。

「病人のあるところへ來て騷がせては濟まないと思つて、途中で食べて來たの。ほんとよ。」

「わたくしが病氣でないと、詰まらない物でも、お孃樣のお口に合ふ物を拵へますのに。それでもお薩の新を先程掘らせたのが、ふかしてある筈でございます。どうぞあちらで少しでも召し上がつて戴きたうございますが。」

「薩摩芋は相變らず結構よ。では御馳走になつて來るわ。」

薩摩芋なら皮があるから好いと弓子は思つたのである。そして山尾といつしよに母屋の奥座敷へ行つた。切角支度をしてあるのだからと云つて、山尾は色々の物を一人で食べてゐる。給仕に出て來た母親は、病人の事を云つては泣く。それを山尾が旨い事を言つて慰めてゐる。母親は涙がばら〳〵こぼれるのに、兩手を顔に當てるでもなく前掛で拭くでもなく、全くの手放しで泣くのである。弓子はこの今迄見たことのない泣き方を妙だと思つて、



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

皺だらけの老人の顔を見てゐたが、ふいと可笑しくなりさうになつたので、さつき汽車の中の空氣枕の紳士を笑つた樣な事になつてはならないと、唇を噛んで餘所見をしてゐたが、とう〳〵席を遁れて、病室へ歸つて行つた。

丁度乳母の子供が歸つて來てゐた。寫眞にもまして美しい子である。乳母はくれ〴〵も母を失ふ此子の事を弓子に賴んだ。

後に乳母が亡くつてから、此子は京橋で待合を出してゐる、父親の妹の内へ引き取られた。その家へ遊びに來る羽左衛門や高麗藏が役者にしたいから、養子にくれろと、度々望んだが、子供が聽かなかつたさうである。

山尾に促されて、弓子は歸支度を始めた。實は「死」の家を離れるのが嬉しかつた。そして堪へがたさうに名殘を惜む乳母を見て、自分を一瞬間不滿足に感じた。

乳母は緣側迄這ひ出て來て、見送つた。もう四時近いのである。片蔭がすつかり出來て、一面の靑い畑の上を涼しい風が吹いてゐる。車の廻りには近所の子供が珍らしさうに集まつて來た。「東京の女は妙だなあ。夏首卷をしてゐらあ」なんぞと顏を見て云ふ。きたない子等の中に乳母の子は別物の樣に美しく見えた。

弓子は「さよなら」と云つて車に乘つた。鼻を垂らして、赤いくしや〳〵した目をした子供達も聲を合せて「さよなら」と云ふ。乳母の家の人達はみんな出て來て見送つた。車はが



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たく〵と細いくねく〵した道をうごき出した。弓子が振り返つて見ると、乳母はどうして登つたか二階の窓から幽靈の樣な顏を出して、こつちを見送つてゐる。弓子は「死」の影が自分に附いて來るやうな心持がした。——完——



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

## 百日紅

白雨

耳聾いて愚なる子や百日紅

蟬ねらふ鳥に智あり雲の峯

鳴神や今蛟龍の雲を得て

薫風や五山にまかる朝の人

遠雷を釣らて苫屋に人語など

腑の病遠雷きくも夢心地

立秋や惱み覺ゆる虫の毒

松原に網あむ漁夫や雲の峯

胡軍過く踝塵千里雲の峰



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 生血

田村とし子

一

安藝治はだまつて顏を洗ひに出て行つた。ゆう子はその足音を耳にしながら矢つ張りぼんやりと椽側に立つてゐた。紫紺縮緬をしぼつた單衣の裾がしつくりと踵を包んで褄先がしやくれて流れてゐる。

昨夜寢るとき引き破いだ薄ものをまだ剝ぎ切らない樣な空の光りの下に、庭の隅々の赤い花白い花がうつとりと瞼をおもくしてゐる。

ゆう子の椽から片足踏み出した足の裏へ、しめつた土から吹いてくる練絹のやうな風が、そつと忍ぶやうにしてさわつてゆく。

ゆう子は足許の金魚鉢を見た。ふつと、興の湧いたやうな顏をすると其所にしやがんで、

「紅しぼり――

緋鹿の子――
あけぼの――
あられごもん――」
と一とつ〳〵指でさして金魚に名をつけた。明け方の空が鉢に映つて、白い光りがところどころ銀箔を落したやうに水のおもてをちらつかしてゐる。緋鹿の子がお俠に水をきつてついと走つた。
ゆう子は鉢のわきに並べてあつた紫のシネラリヤの花を、一とつ摘んで水の中にこぼした。眞つ赤な――まだ名を付けなかつた金魚が、小さなお壺口を花片にふれると、すぐ驚いたやうに大きな尾鰭を振り動かして底の方へ沈んでゆく。銀箔があちこちと、ちろ〳〵と搖れた。
ゆう子は立てた膝の上へ左の腕をのせて、それへ右の肱をかつて掌で額をおさへた。垂れた頭の重みに堪へないやうに手首が他愛なくしなつて見へる。眼尻のところへ拇指があたつて眼が險しくつれた。
――緋縮緬の蚊帳の裾をかんで女が泣いてゐる。男は風に吹きあほられる伊豫簾に肩の上をたゝかれながら、町の灯を窓からながめてゐる。男はふいと笑つた。そうして、
「仕方がないぢやないか。」



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云つた。――

生臭い金魚の匂ひがぼんやりとした。

何の匂ひとも知らず、ゆう子はぢつとその匂ひを嗅いだ。いつまでも、いつまでも、嗅いだ。

「男の匂ひ。」

ふと思つてゆう子はぞつとした。そうして指先から爪先までちり〳〵と何かゞ傳はつてゆく様に震へた。

「いやだ。いやだ。いやだ。」

刄を握つて何かに立向ひたい様な心持――昨夜からそんな心持に幾度自分の身體を摑みしめられるだらう。

ゆう子は片手を金魚鉢の中にずいと差入れて、憎いもの丶やうに金魚をつかんだ。

「目ざしにしてやれ。」

然う思ひながら、素て着た單衣の襟を合はせた金のピンをぬきながら、摑んだ金魚を水から上げた。白金の線が亂れみだれるやうに硝子鉢の水がうごく。

胡麻粒のやうな目の玉をねらつてピンの先きを突きさすと、丁度手首のところで金魚は尾鰭をばた〳〵させる。生臭い水のしぶきがゆう子の藤鼠色の帶へちつた。金魚をピンの



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奥へよせる時、ピンの尖きてゆう子は自分の人差指の先きを突いた。爪ぎはに、ルビーのやうな小さい血の玉がぽつとふくらんだ。

金魚の鱗が青く光つてゐる。赤いまだらが乾いて艶が消へた。金魚は上向きに口をぽんと丸くあけて死んでゐる。花の模様の踊り扇をひろげた様だつた尾鰭は、すぼんだやうにだらりと萎れついてさがつてゐる。

ゆう子は其れをしばらく翳して見てゐたが、庭へ抛り投げてしまつた。丁度飛石の上へ乘つた金魚の骸へ、一と瞬きづゝ明けてゆく空の光りが、薄白く金魚をつつんでは擴がるやうに四方へちらけてゆく。

ゆう子は座敷へはいつた。まだ消さずにある電氣の光りが薄樺色の反射にみなぎつてゆう子の額を熱ばませる。ゆう子は窓の下の大きい姿見の前へ行つてぴつたり座ると、傷づいた人差指を口に含んだ。――ぢりりと滲み出すやうに涙が兩の眼をあふれた。

ゆう子は袂を顔にあてゝ泣いた。泣いても、泣いても悲しい。然し、自分の頬をひつたりとなつかしい人の胸に押あてゝゐる時のやうな、そんな甘つたるさが涙に薄すりと色を着けてながれる。

「いま指を含んだとき、自分の指に自分の唇のあたゝかさを感じた、それが何故かうも悲しいのであらう。」



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゆう子は然う思ひながら、喘ぐやうに泣いた。

いくらでも泣ける。ありたけの涙が出きつてしまふと、ふつつと息が絶えるのぢやないか、息が絶へやうとして出るだけの涙が流れつくすのぢやないか。と思ふほど。泣くだけ泣いて、涙が出るだけ出て、蓮花に包まれて眠るやうに花の露に息をふさがれて死ぬるものなら嬉しからう。涙の熱さ！たとへ肌がやきつくす程の熱い涙で身體を洗つても、自分の身體はもとに返らない。もう舊に返りはしない。――

ゆう子は唇を嚙みながら、ふと顏を上げて鏡の內を見た。物の形をはつきりと映したまま鏡のおもての光りが搖がずにゐる。紫紺の膝がくづれて赤いものが見えてゐた。

ゆう子は其れを凝と見た。そのちりめんの一と重下のわが肌を思つた。

毛孔に一本々々針を突きさして、こまかい肉を一と片づゝ抉りだしても、自分の一度侵つた汚れは削りとることができない。――

顏を洗ひに行つた安藝治が手拭をさげてかへつて來た。ゆう子を見るとだまつて隣りの部屋へはいつて行つた。何時の間にか女中が來てゐたと見えて、女と話する安藝治の聲がした。

女中は直ぐ床を片付けに入つて來た。ゆう子を見ると笑ひ顏で挨拶したけれど、ゆう子は振向きもしなかつた。そうして、根深く食ひこんだやうな疲れた夢の覺めぎはのやうに、



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

力のない身體をだらしもなく横座りしながら、頭をふつて小供のやうに啜り上げた。
硝子戸を開け閉てする宿屋の朝の掃除のやかましい音がひゞいてくる。電車のおとがぎひと鳴つて通つたとき、ゆう子はこの宿が大通りの内に家並を向けてゐることを思ひだして恐しくなつた。此家を出るのに何所から出たらいゝだらう、女中に頼んで裏口から出して貰はうか、ゆう子はそんな事を考へながら袂から半紙をだして、細く引き裂いて傷ついた指を卷いた。

## 二

二人は水色の洋傘と生つ白いパナマの帽子をならべて、日盛りの町をあるいてゐた。まるで强烈な日光にすべての色氣を奪はれ盡してしまつたやうに、着くづれた皺だらけの二人の着物にあざやかな色彩も見えなかつた。熱い日に叩き立てられるやうに、やゝくざな恰好をして二人は眞晝の炎天をたゞ素直にあるいてゆく。燒き鏝を當てられるやうに二人の頸元はぢり〳〵と照らされる、白い足袋はもう乾き切つた埃で薄い代赭色に染まつてゐる。
二人は路次をはいつた。
狹い庇間の下を風が眞つ直ぐに通して、地面が穴の底のやうに濕つてゐる。井戸の向ふ角の家の眞つ暗な土間で、汚れた手拭を頸に捲きつけた女が機を織つてゐた。二人は突き



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

當りの石段を上つて行つた。上り切ると、ゆう子は柵のところへ行つて向島の堤をながめた。

河も堤も熱さにうんざりしたやうに、金色の光りを投げだした儘何の影も動かさなかつた。透き間もなく照りこんだ夏の日光を、彈き返すやうなトタン家根の上に、黑い煙りが這ひ付いてる暑苦しい町並を眼の先に見つけると、ゆう子は直ぐ眼を眩しくさせて日蔭の方を振返つた。安藝治は敷石の上に立つて、社の前に鈴をがら〳〵云はせてゐる雛妓らしい娘の後姿を見てゐた。

聖天の御堂の奥は黑い幕をはつた樣に薄暗い。ところ〳〵器物の銀の色が何かの暗示のやうに、神秘めいて白く光つてゐる中に、蠟燭が大きな燭臺の輪をめぐつて何本も上下左右にちろ〳〵と灯つてゐる。それが丁度、今の炎天を呪ふ祈りの灯のやうに見える。荒行で斷食した坊さんが眼にだけ一念をひそめた輝きのやうな光りを、よわ〳〵した蠟燭の焰の先きに一とすぢ閃かしてゐる。

其所に二三人の人の影が見えた。

二人は表の石段をおりた。ちつとも日蔭のない照りはしやいだ通りは、燒けた銅板をはり詰めたやうに見る目も吐く息も切ない。ゆう子は洋傘を低くさした。

「もう別れなければ。もう別れなければ。」



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゆう子は幾度も然う思つた。男と離れて、昨夜の事を唯一人しみ〴〵と考へなければならないやうな焦慮つた思ひもする。けれどゆう子は何うしても自分から男へ口がきけなかつた。兩手も兩足もきつい鐵輪をはめられたやうに、少しも身體が自由にならなかつた。

「自分に蹂躙された女が震へてゐる。口もきゝ得ずにゐる。そうして炎天を引ずり廻されてゐる。女は何所まで附いてくるつもりだらう。」

だまつてる人は其樣ことを考へてゐるのぢやないかとゆう子は不意と思つた。ゆう子はそつと額の汗をふいた。

　いまの雛妓らしい娘が二人を通り越してとつとと歩いてゆく。繪模樣の朱の日傘の下から、俯向いて衣紋をぬいた細い頸筋が解けそうに透き通つて白々と見える。荒い矢羽根がすりの紺すきやの裾掛けが、眞つ白な素足をからんではほつれ、からんではほつれしてゆく。貝の口にむすんだ紫博多の帶のかけがきりりと上をむいてゐる。

　薄い長い袂が引ずるやうな、美しい初々しひ姿をゆう子はぎらつく空の下でしみ〴〵と眺めた。そうして羨しかつた。かうして昨夜の身體をその儘炎天にさらして行く自分には、日光に腐爛してゆく魚のやうな臭氣も思はれた。ゆう子は自分の身體を誰かに摘みあげて拋り出してもらい度いやうな氣がした。

　二人はだまつて歩いて行く。廣い通りが盡きると、狹い裏通りへまがつた。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

赤い風鈴を下げた氷屋が葭簀のかげを濡らしてゐる。ちやん〳〵の襦袢一枚で、黒い腕をだした女が小供に義太夫を敎へてゐるのが、表からすつかり見えた家があつた。椽の低い小間物店から、熟んだやうな油の匂いがした。安藝治が先きに立つて、蕎麥屋の裏から公園へ拔け道した。

きつい日に照りつけられて、阿彌陀堂の赤い丹塗りの色が土器色に變つて見へた。龍頭觀音の噴水がぴたりととまつてゐた。如露の水ほども落ちてゐなかつた。炎天に水を乾しつくされ、銅像の全身をきら〳〵と焦きなぶられて高いところに据へられた觀音の立像を見上げてゐると、ゆう子は頭の髮の毛を火の炎でやき拂はれるやうな氣持がした。

潮染めの浴衣を着て赤い帶をしめた、眞つ白な顏をした女たちが、汗の足にまつはり付いたやうな浴衣の裾のわれ目から赤い蹴出しをちらつかして通つてゆく。肌をぬいで綱襦袢一とつになつた男が扇子を使ひながら通つてゆく。水の出ない噴水のまわりにもいろ〳〵な人が集つてゐた。

二人は然うした人だちにおづ〳〵とながめられた。安藝治はそれを厭はしそうにして目を避けてゐた。ゆう子は然うした卑しい表情で自分たちを見て行く人と、今の自分と云ふものの上とにそれ程の隔だたりがあるやうに見へなかつた。いくらでも覗きたいほど肉分を見せてやれと思つた。どうせ自分は、その人たちには珍らしくないたつ張り脩つた肉に



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

包まれてるやうな人間だと思つた。
安藝治はまた歩きだした。ゆう子は何となく自分の身體を何かに投げかけたいやうな氣がした。太たことが云つて見たいやうな氣がした。然し矢つ張り男に口をきくのはいやであつた。
花屋敷の前の人混みを通つて、玉乘りの前まてくると安藝治は、
「はいつて見やう。」
と云つてゆう子に構はずづん／＼入らうとした。ゆう子は默つて隧いてはいつた。
高い小屋がけの二階が眞つ暗だつた。柱も薄縁も蒲團も、寐汗でぬれたものを掴むやうな、粘つた濕り氣をふくんでゐる。
二階にはまばらに五六人ほど人がゐた。その人たちがみんな、又と見付け得られない賓ものに執着したやうな顏付をして、手欄にしつかりとつかまつて下の演伎をながめてゐる。安藝治はさも居やすい所を見出したやうな樣子で、薄い蒲團を腰の下に入れた。そうしてゆう子の顏を見て微笑した。
何か鈴のやうなものがから／＼となつた。肉色の襯衣を着た男の子が、太い聲で次ぎの演技の口上を云つてゐる。外に垂れた廣告幕が少し上つたり下つたりする度に、表に立つた仰向いた人の顏がかくれて舞臺が薄暗くなる。小さな銀杏返しに引つ詰めて結いた、赤い



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

顔におしろいを塗つた女の子が桃色の襯衣を着て兩手を兩腋に挾んで四五人立つてゐる。それが紅白で綯つた輪をもつて玉に乘つてあるきだした。

輪を足から手へくゞらせたり、肩へ拔かしたりしながら乘つた玉をまわしてゆく。その白粉のついた小さい耳のわきがゆう子は悲しかつた。ゆう子は後の、棧敷のやうな高いところへ行つて其所へ腰をかけながら、塗骨の扇子を帶からぬいた。

扇ぐときに生ぬるいやうな香水の匂ひがなつかしく泌みる。外へ垂れた幕がわづか上がる時、其所に群集した人の頭から後の池の面へかけて、投げつけたやうな鋭い晝の光りがゆう子の目にぱつと映る。演伎の間々にその藝を演じる娘たちや大きな男たちが、だまつて茫然とその外の群集を見てゐるのが、薄暗い小屋に倦怠の氣がしみ通つてゆく樣な氣がした。

ふと氣が付くと淺黄の袴をはいた振袖の娘が舞臺に現はれてゐた。大きなふつさりした潰しの島田に紫の鹿の子がかゝつてゐた。

その娘は臺の上に仰向に寢て足の先で傘をまわした。眞つ白な手甲が細い手首を括つてゐた。臺の兩脇に長い袂が垂れてゐた。窄んだ傘を足でひろげて、傘のふちを足に受けてくる／＼と風車のやうにまわしてまわしぬく。その脛當ても眞つ白かつた。そうして小さな白足袋——淺黄繻子の男袴が時々ひだを亂して、垂れた長い袂が搖れる。その時の下座



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の三味線の、糸を手繰つては縺らせ、縺らせては手繰りよせるやうな曲がゆう子の胸をきつと絞つた。

娘は臺から下りるとにつこり笑つて會釋しながら直ぐ奥へ入つてしまつた。髭がつぶれてゐた。熨斗目の長い袖が目に殘つた。安藝治は他の人のやうに手摺りに縋りついて下を見てゐる。その細い頸筋をゆう子はぢつと見つめた。女の子の足の上へ澤山に桶を積み上げて、その上へのせた天水桶の中へ男の子がはいつたり、水藝をやつたりまだ／＼幾つもそれに似たことを幾人もの子が代る／＼やつてゐる。ゆう子は倦みつかれて自分の身體が汗の中へ溶け込んでゆくやうな氣持がした。自分は何か悲しまなければならないことがあつたのにと思ふ傍から、

「何うにでもなれ。何うにでもなれ。」

と云ひ度い氣がする。何所まで落ち込んで行つたところで、落ち込んだ先きには矢つ張り人の影は見える。――と思つてゆう子は小屋の中の人たちがなつかしかつた。淺黄繻子の男袴――それがゆう子の眼先をはなれなかつた。

安藝治は演伎が番組を繰り返して同じ事をやる樣になつても歸らうと云はなかつた。ゆう子もこの小屋を出たくはなかつた。折角暗い巣を見付けながら、又明るい光りを眞面に浴びるのは辛かつた。いつまでも、夜るになるまで居られるものならかうして居たいと思



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。ゆう子は高いところに腰をかけて何も考へる力もなく、唯ぼんやりと半分は眠つてゐた。

　蒸すやうな、臭い空氣が、時々ゆう子の身體を撫でまわしてゆく。ばた〳〵とまばらな拍手が下の土間の方から、氣の無い響きを持つてくる。その間にゆう子はふと、かさつと云つた羽搏きのやうな音を耳近く聞いた。

　うつとりしてゐた瞼がかつきりと反つたやうな氣がした。ゆう子は後を見まわしながら遂立上つたけれども、何も見えなかつた。

　後向きになつて、ゆう子は煤けた柱から、汚れが垢のやうに積つた薄縁をぢつと見た。ふと、その後の羽目板に、大きな魚の尾鰭のやうな黒いものの動いてるのが目に付いた。ゆう子はぢつとして其の動くものを眺めてゐた。動かなくなるとゆう子は扇子でその黒いものをぢつと抑へて見た。扇子をひく儘にその黒いものがだん〳〵羽目板の外へ引摺られて出てくる。何とも付かず一尺ほど引きてた時、その輪廓をぐるりと見て――それが蝙蝠の片々の翼だと知れた。

ゆう子はばたりと扇子を落した。さうして驅けよるやうにして安藝治の坐つてゐる傍へ立つたが、安藝治は氣が付かなかつた。ゆう子は身體の血が冷え付いたやうな思ひをしながら、もう一度羽目板の方を振返つて見た。もう黒い翼は見えなかつた。その傍の壁の隙間



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から夕暮れらしい薄黄いな日射しが流れこんでゐた。

二人は小屋を出た。もう白地の浴衣に水の底のやうな涼しい影が見える夕方になつてゐた。安藝治は矢つ張りだまつて歩いて行く。ゆう子は目眩いがするほど空腹くなつたのに氣が付いた。男に默つて中途から別れて了はう。そんな事も考へながら、膝のうしろにべた〳〵と觸る汗にしみた着物が氣味がわるくてならなかつた。

「この女は何所まで附いてくるんだらう。」

男の樣子にそんな所が見えると、ゆう子が思つたとき、

「何か食べなくちや。」

と男が云つた。

「私は歸りたい。」

「歸る？」

「ええ。」

男は又默つて歩いて行つた。二人は池の橋を渡つて山へあがると、其所の端の氷店の腰かけへ云ひ合はしたやうに腰をかけた。二人の前の植え込みが打水の雫をちらしてゐた。二人はまた何時までも〳〵其所を立たなかつた。

日の入る頃になつて汗を洗ひ流した連中が、折目の見える浴衣と着かへて、もう其方此



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

方と歩いてゐた。二人は一日の汗になへ切つた身體を又仁王門から馬道の方へはこんだ。

二人は河岸をあるいて砂利置場から宵暗の被せかける隅田川の流れをながめた。

ゆう子はもう、自分の身體を男が引つ抱へて何所へでもいいから連れてつて來れればいいと思ひながら砂利置場の杭へよりかゝつた。

「蝙蝠が、淺黄繻子の男袴を穿いた娘の、生血を吸つてる、生血を吸つてる――」

男に手を取られてはつとした。その時人差指の先きに卷いてあつた紙がいつの間にか取れてしまつたのに氣が付いた。生臭い匂いがぷんとした――完――



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 元始女性は太陽であつた。——青鞜發刊に際して——

らいてう

元始、女性は實に太陽であつた。眞正の人であつた。

今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。

偖てこゝに「青鞜」は初聲を上げた。

現代の日本の女性の頭腦と手によつて始めて出來た「青鞜」は初聲を上げた。

女性のなすことは今は只嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知つてゐる、嘲りの笑の下に隱れたる或ものを。

そして私は少しも恐れない。

併し、どうしやう女性みづからがみづからの上に更に新にした羞恥と汚辱の慘ましさを。



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女性とは斯くも嘔吐に價するものだらうか、

否々、眞正の人とは――

私共は今日の女性として出來る丈のことをした。心の總てを盡してそして産み上げた子供がこの「青鞜」なのだ。よし、それは低能兒だらうが、奇形兒だらうが、早生兒だらうが仕方がない、暫くこれで滿足すべきだ、と。

果して心の總てを盡したらうか。あゝ、誰か、誰か滿足しやう。

私はこゝに更により多くの不滿足を女性みづからの上に新にした。

女性とは斯くも力なきものだらうか、

否々、眞正の人とは――

併し私とて此眞夏の日盛の中から生れた「青鞜」が極熱をもよく熱殺するだけ、それだけ猛烈な熱誠を有つてゐると云ふことを見逃すものではない。

熱誠! 熱誠! 私共は只これによるのだ。

熱誠とは祈禱力である。意志の力である。禪定力である、神道力である。云ひ換へれば

精神集注力である。

神秘に通ずる唯一の門を精神集注と云ふ。

今、私は神秘と云つた。併しともすれば云はれるかの現實の上に、或は現實を離れて、手の先で、頭の先で、はた神經によつて描き出された拵へもの丶神秘ではない。夢ではない。私共の主觀のどん底に於て、人間の深さ瞑想の奥に於てのみ見られる現實其儘の神秘だと云ふことを斷つて置く。

私は精神集注の只中に天才を求めやうと思ふ。

天才とは神秘そのものである。眞正の人である。

天才は男性にあらず、女性にあらず。

男性と云ひ、女性と云ふ性的差別は精神集注の階段に於て中層乃至下層の我、死すべく、滅ぶべき假現の我に屬するもの、最上層の我、不死不滅の眞我に於てはありやうもない。

私は曾て此世に女性あることを知らなかつた。男性あることを知らなかつた。

多くの男女は常によく私の心に映じてゐた、併し私は男性として、はた女性として見てゐたことはなかつた。

然るに過剩な精神力の自からに溢れた無法な行爲の數々は遂に治しがたく、救ひがたき迄の疲勞に陷れた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人格の衰弱！　實にこれが私に女性と云ふものを始めて示した。と同時に男性と云ふものを。

かくて私は死と云ふ言葉をこの世に學んだ。

死！　死の恐怖！　曾て天地をあげて我とし生死の岸頭に遊びしもの、此時、ああ、死の面前に足のよろめくもの、滅ぶべきもの、女性と呼ぶもの。

曾て統一界に住みしもの、此時雜多界にあつて途切れ、途切れの息を胸でするもの、不純なるもの、女性と呼ぶもの。

そして、運命は我れ自から造るものなるを知らざるかの腑甲斐なき宿命論者の群にあやふく歩調を合せやうとしたことを、ああ思ふさへ冷たい汗は私の膚へを流れる。

私は泣いた、苦々しくも泣いた、日夜に奏でゝ來た私の竪琴の糸の弛んだことを、調子の低くなつたことを。

性格と云ふものゝ自分に出來たのを知つた時、私は天才に見棄てられた、天翔る羽衣を奪はれた天女のやうに、陸に上げられた人魚のやうに。

私は歎いた、傷々しくも歎いた。私の恍惚を、最後の希望を失つたことを。

とは云へ、苦悶、損失、困憊、亂心、破滅總て是等を支配する主人も亦常に私てあつ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

私は常に主人であつた自己の權利を以て、我れを支配する自主自由の人なることを滿足し、自滅に陥れる我れをも悔ゆることなく、如何なる事件が次ぎ次ぎと起り來る時でも我の我たる道を休みなく歩んで來た。

ああ、我が故郷の暗黒よ、絶對の光明よ。

自から(オノヅカ)の溢れる光輝と、温熱によつて全世界を照覽し、萬物を成育する太陽は天才なるかな。眞正の人なるかな。

元始、女性は實に太陽でなつた。眞正の人であつた。

今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く病人のやうな蒼白い顔の月である。

私共は隱されて仕舞つた我が太陽を今や取戻さねばならぬ。

「隱れたる我が太陽を、潜める天才を發現せよ、」こは私共の内に向つての不斷の叫聲、押へがたく消しがたき渇望、一切の雜多な部分的本能の統一せられたる最終の全人格的の唯一本能である。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此叫聲、此渇望、此最終本能こそ熱烈なる精神集注とはなるのだ。

そしてその極るところ、そこに天才の高き王座は輝く。

青鞜社規則の第一條に他日女性の天才を生むを目的とすると云ふ意味のことが書いてある。

私共女性も亦一人殘らず潜める天才だ。天才の可能性だ。可能性はやがて實際の事實と變ずるに相違ない。只精神集注の缺乏の爲、偉大なる能力をして、いつまでも空しく潜在せしめ、終に顯在能力とすることなしに生涯を終るのはあまりに遺憾に堪へない。

「女性の心情は表面なり、淺き水に泛ぶ輕佻浮噪の泡沫なり。されど男性の心情は深し、其水は地中の凹窩を疾走す」とツアラトゥストラは云つた。久しく家事に從事すべく極め付けられてゐた女性はかくて其精神の集注力を全く鈍らして仕舞つた。

家事は注意の分配と不得要領によつて出來る。

注意の集注に、潜める天才を發現するに不適當の境遇なるが故に私は、家事一切の煩瑣を厭ふ。

煩瑣な生活は性格を多方面にし、複雑にする、けれども其多方面や、複雑は天才の發現



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と多くの場合反比例して行く。

潜める天才に就て、疑ひを抱く人はよもあるまい。

今日の精神科學でさへこれを實證してゐるではないか。總ての宗教にも哲學にも何等の接觸を有たない人でも最早かの催眠術、十八世紀の中葉、墺國のアントン、メスメル氏に起原を發し、彼の熱誠と忍耐の結果、遂に今日學者達の眞面目な研究問題となつたかの催眠術を多少の理解あるものは疑ふことは出來まい。いかに纖弱(かよわ)い女性でも一度催眠狀態にはいる時、或暗示に感ずることによつて、無中有を生じ、死中活を生じ忽然として靈妙不可思議とも云ふべき偉大な力を現すことや、無學文盲の田舍女が外國語を能く話したり、詩歌を作つたりすることなどは屢々私共の目前で實驗された。また非常時の場合、火事、地震戰爭などの時、日常思ひ至らないやうな働をすることは誰れでも經驗することだ。

完全な催眠狀態とは一切の自發的活動の全く休息して無念無想となりたる精神狀態であると學者は云ふ。

然らば私の云ふところの潜める天才の發現せらるべき狀態と同一のやうだ。私は催眠術に掛れないので遺憾ながら斷言は出來ないが、少くとも類似の境界だとは云へる。

無念無想とは一體何だらう。祈禱の極、精神集注の極に於て到達し得らるゝ自己忘却で



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はないか。無爲、恍惚ではないか。虚無ではないか。眞空ではないか。

實にこゝは眞空である。眞空なるが故に無盡藏の智恵の貨の大倉庫である。一切の活力の源泉である。無始以來植物、動物、人類を經て無終に傳へらるべき一切の能力の福田である。

こゝは過去も未來もない、あるものは只これ現在。

ああ、潛める天才よ。我々の心の底の、奥底の情意の火焰の中なる「自然」の智恵の卵よ。全智全能性の「自然」の子供よ。

「フランスに我がロダンあり。」

ロダンは顯れたる天才だ。彼は偉大なる精神集注力を有つてゐる。一分の隙なき非常時の心を平常時の心として生きてゐる。彼は精神生活のリズムにせよ、肉體生活のリズムにせよ、立所に自由に變ずることの出來る人に相違ない。むべなる哉、インスピレーションを待つかの奴隷のやうな藝術の徒を彼は笑つた。

其意志の命ずる時、そこに何時でもインスピレーションがある彼こそ天才となるの唯一の鍵を握つてゐる人と云ふべきだらう。

三度の箸の上下にも、夕涼の談笑にも非常時の心で常にありたいと希ふ私は曾て白樺の

ロダン號を見て多くの暗示を受けたものだ、物知らずの私にはロダンの名さへ初耳であつた。そしてそこに自分の多くを見出した時、共鳴するものあるをいたく感じた時、私はいかに歡喜に堪へなかつたか。

以來、戶を閉じたる密室に獨座の夜々、小さき燈火が白く、次第に音高く、嵐のやうに、しかもいよいよ單調に、瞬もなく燃える時、私の五羽の白鳩が、優しい赤い眼も、黑い眼も同じ薄絹の膜に蔽はれて寄木（やどりぎ）の上にぷつと膨れて安らかに眠る時、私は大海の底に獨り醒めてゆく、私の筋は緊張し、渾身に血潮は漲る。其時、「フランスに我がロダンあり。」と云ふ思ひが何處からともなく私の心に浮ぶ。そして私はいつか彼と共に「自然」の音樂を——かの失はれたる高調の「自然」の音樂を奏でゝゐるのであつた。

私はかの「接吻」を思ふ。あらゆるものを情熱の坩堝に鎔す接吻を、私の接吻を。接吻は實に「一」である。全靈よ、全肉よ、緊張の極（はて）の圓かなる恍惚よ、安息よ、安息の美よ。感激の涙は金色の光に輝くであらう。

日本アルプスの上に灼熱に燃えてくる〳〵と廻轉する日沒前の太陽よ。孤峯頂上に獨り立つ私の靜けき慟哭よ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弱い、そして疲れた、何ものとも正體の知れぬ、把束し難き恐怖と不安に絶えず戰慄する魂。頭腦の底の動搖、銀線をへし折るやうな其響、寢醒時に襲つて來る黑い翅の死の强迫觀念。けれど、けれど、一度自奮する時、潜める天才はまだ私を指導してくれる。まだ私を全く見棄はしない。そして何處から來るともなし私の總身に力が漲つてくる、私は只々强き者となるのだ。私の心は大きくなり、深くなり、平になり、明るくなり、視野は其範圍を增し、個々のものを別々に見ることとなしに全世界が一目に映じてくる。あの重かつた魂は輕く、輕く、私の肉體から拔け出して空にかゝつてゐるのだらうか。否、哭は目方なきものとなつて氣散して仕舞つたのだらうか。私はもう全く身も心も忘れ果てて云ふべからざる統一と調和の感に醉つて仕舞ふのだ。

生も知らない。死も知らない。

敢て云へば、そこに久遠の「生」がある。熱鐵の意志がある。

この時ナポレオンはアルプス何あらむやと叫ぶ。實に何ものの障碍も其前にはない。眞の自由、眞の解放、私の心身は何等の壓迫も、拘束も、恐怖も、不安も感じない。そして無感覺な右手が筆を執つて何事かをなほ書きつける。

私は潜める天才を信せずには居られない。私の混亂した內的生活が僅に統一を保つて行けるのは只これあるが爲めだと信ぜずにはゐられない。



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自由解放！　女性の自由解放と云ふ聲は隨分久しい以前から私共の耳邊にざわめいてゐる。併しそれが何だらう。思ふに自由と云ひ、解放と云ふ意味が甚しく誤解されてゐはしなかつらうか。尤も單に女性解放問題と云つても其中には多くの問題が包まれてゐたらう。併し只外界の壓迫や、拘束から脫せしめ、所謂高等敎育を授け、廣く一般の職業に就かせ、參政權をも與へ、家庭と云ふ小天地から、親と云ひ、夫と云ふ保護者の手から離れて所謂獨立の生活をさせたからとてそれが何で私共女性の自由解放であらう。成程それも眞の自由解放の域に達せしめるによき境遇と機會とを與へるものかも知れない。併し到底方便である。手段である。目的ではない。理想ではない。

とは云へ私は日本の多くの識者のやうな女子高等敎育不必要論者では勿論ない。「自然」より同一の本質を受けて生れた男女に一はこれを必要とし、一はこれを不必要とするなどのことは或國、或時代に於て暫くは許せるにせよ、少しく根本的に考へればこんな不合理なことはあるまい。

私は日本に唯一つの私立女子大學があるばかり、男子の大學は容易に女性の前に門戶を開くの寬大を示さない現狀を悲しむ。併し一旦にして我々女性の智識の水平線が男性のそれと同一になつたとしたところでそれが何だらう。抑も智識を求めるのは無智、無明の闇



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脱して自己を解放せむが爲に外ならぬ。然るにアミイバのやうに貪り取つた智識も一度眼を拭つて見れば殼ばかりなのに驚くてはないか。そして又我々は其殼から脱する爲め多くの苦闘を余儀なくせねばならないてはないか。一切の思想は我々の眞の智惠を暗まし、自然から遠ざける。智識を弄んで生きる徒は學者かも知れないが到底智者てはない。否、却て眼前の事物其儘の眞を見ることの最も困難な盲に近い徒てある。

釋迦は雪山に入つて端座六年一夜大悟して、「奇哉、一切衆生具有如來智惠德相、又曰、一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛」と。彼は始めて事物其儘の眞を徹見し、自然の完全に驚嘆したのだ。かくて釋迦は眞の現實家になつた。眞の自然主義者になつた。空想家てはない。實に全自我を解放した大自覺者となつたのだ。

私共は釋迦に於て、眞の現實家は神秘家でなければならぬことを、眞の自然主義者は理想家でなければならぬことを見る。

我がロダンも亦さうだ。彼は現實に徹底することによつてそこに現實と全く相合する理想を見出した。

「自然は常に完全なり、彼女は一つの誤謬をも作らず」と云つたではないか。自からの意力によつて自然に從ひ、自然に從ふことによつて自然を我ものとした彼は自から自然主義者と云つてゐる。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

日本の自然主義者と云はれる人達の眼は現實其儘の理想を見る迄に未だ徹してゐない。集注力の缺乏した彼等の心には自然は決して其全き姿を現はさないのだ。人間の瞑想の奥底に於てのみ見られる現實即理想の天地は彼等の前に未だ容易に開けさうもない。

彼等のどこに自由解放があらう。あの首械、手械、足械はいつ落ちやう。彼等こそ自縄自縛の徒、我れみづからの奴隷たる境界に苦しむ憐れむべき徒ではあるまいか。

私は無暗と男性を羨み、男性に眞似て、彼等の歩んだ同じ道を少しく遲れて歩まうとする女性を見るに忍びない。

女性よ、芥の山を心に築かむよりも空虚に充實することによつて自然のいかに全きかを知れ。

然らば私の希ふ眞の自由解放とは何だらう、云ふ迄もなく潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に發揮させることに外ならぬ。それには發展の防害となるものゝ總てをまづ取除かねばならぬ。それは外的の壓迫だらうか、はたまた智識の不足だらうか、否、それらも全くなくはあるまい、併し其主たるものは矢張り我そのもの、天才の所有者、天才の宿れる宮なる我そのものである。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我れ我を遊離する時、潛める天才は發現する。私共は我がうちなる潛める天才の爲めに我を犧牲にせねばならぬ。所謂無我にならねばならぬ。（無我とは自己擴大の極致である。）

只私共の内なる潛める天才を信ずることによつて、天才に對する不斷の叫聲と、渴望と、最終の本能とによつて、祈禱に熱中し、精神を集注し以て我を忘れるより外道はない。

そしてこの道の極るところ、そこに天才の玉座は高く輝く。

私は總ての女性と共に潛める天才を確信したい。只唯一の能性に信賴し、女性としてこの世に生れ來つて我等の幸を心から喜びたい。

私共の救主は只私共の内なる天才そのものだ。最早私共は寺院や、敎會に佛や神を求むるものではない。

私共は最早、天啓を待つものではない。我れ自からの努力によつて、我が内なる自然の秘密を曝露し、自から天啓たらむとするものだ。

私共は奇蹟を求め、遠き彼方の神秘に憧れるものではない、我れ自からの努力によつて我が内なる自然の秘密を曝露し、自から奇蹟たり、神秘たらむとするものだ。

私共をして熱烈なる祈禱を、精神集注を不斷に繼續せしめよ。かくて飽迄も徹底せしめ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よ。潜める天才を産む日まで、隠れたる太陽の輝く日まで。

其日私共は全世界を、一切のものを、我ものとするのである。

其日私共は唯我獨存の王者として我が踵もて自然の心核に自存自立する反省の要なき眞正の人となるのである。

そして孤獨、寂寥のいかに樂しく、豐かなるかを知るであらう。

最早女性は月ではない。

其日、女性は矢張り元始の太陽である。眞正の人である。

私共は日出づる國の東の水晶の山の上に目映ゆる黄金の大圓宮殿を營まうとするものだ。

女性よ、汝の肖像を描くに常に金色の圓天井を撰ぶことを忘れてはならぬ。

よし、私は半途にして斃るとも、よし、私は破船の水夫として海底に沈むとも、なほ麻痺せる雙手を擧げて「女性よ、進め、進め。」と最後の息は叫ぶであらう。

今私の眼から涙が溢れる。涙が溢れる。

私はもう筆を擱かねばならぬ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併しなほ一言云ひたい。私は「青鞜」の發刊と云ふことを女性のなかの潜める天才を、殊に藝術に志した女性の中なる潜める天才を發現しむるによき機會を與へるものとして、又その爲の機關として多くの意味を認めるものだと云ふことを、よしこゝ暫らくの「青鞜」は天才の發現を防害する私共の心のなかなる塵埃や、渣滓や、籾殻を吐出すことによつて僅に存在の意義ある位のものであらうとも。

私は又思ふ、私共の怠慢によらずして努力の結果「青鞜」の失はれる日、私共の目的は幾分か達せられるのであらう、と。

最後に今一つ、青鞜社の社員は私と同じやうに若い社員は一人殘らず各自の潜める天才を發現し、自己一人に限られたる特性を尊重し、他人の犯すことの出來ない各自の天職を全うせむ爲に只管に精神を集中する熱烈な、誠實な眞面目な、純朴な、天眞な、寧ろ幼稚な女性であつて他の多くの世間の女性の團體にともすれば見るやうな有名無實な腰掛つぶしは斷じてないことを切望して止まぬ私はまたこれを信じて疑はぬものだと云ふことを云つて置く。

烈しく欲求することは事實を産む最も確實な眞原因である。――完――



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 猫の蚤

國木田治子

「また始まつた、秋ちやん！およしよ、嫌だと云ふものを無理に取るには及ばないわね。」と母親は嫌がる猫の蚤を取つて居る末娘の秋子に斯う言つた。

「母さんが其様な事を仰しやるから尚猫が嫌がるのだわ」。と言つて秋子はなか〳〵止めやうとはしなかつた。

「また怪我をしやうと思つて」、と母親は讀み掛けの新聞に目を落した。

猫は體に觸られるのが煩さいと見えて尾を振つたり、ニヤア！と云つて口を開いて秋子の手に喰ひ付きさうな様子を見せた。其度に秋子は大急ぎて手を引込ませるが、白い毛の間にチヨロ〳〵する蚤を見ると又直ぐ手を出した。寝むり掛けて居た猫はまた觸られたので、ニヤア！と言つて首を持ち上げたが、ころりと寝返りを打つた。すると今迄より尚蚤が居るので、



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「赤ちやん、此様に澤山居るじやあないか。」と言つて又取りに掛つた、其聲を聞いた母親は。

「およしと言ふのに。」と言つた聲は强かつた。左様云はれると秋子は腹立たしげに猫の毛を逆なでにして、

「馬鹿め、お蔭で叱られた。」と言ひながら猫の頭を打つた。猫は素早く秋子の手を引掻いた。

「アッ！。」と思はず秋子は聲を立てたが、無言で立ち上つて往來の見える二疊の窓の所に行つて、座敷の方を背にして立つた。手の甲を見ると二筋許りの蚯蚓腫れが出來て血が滲み出して居た。

「馬鹿猫め、覺えて居ろ。」と呟いて疵を視詰めた。

座敷で裁縫をしながら、チョイ〳〵秋子の様子を見て居た姉の濱子は、「アッー」と言つたまゝ二疊の方へ行く秋子の後姿を「可い氣味だ一」と言ひたげの目で見送つた。

今年高等小學を卒業した十六歳の秋子は、急に大人びて、髮の結ひ方を氣にしたり白粉をつけて氣取つたりするが、長の日を爲す事もなく格子の外に立つて近所の小供達の遊ぶ様を眺めたり、家に居れば鏡に向ふか、小女雜誌を讀むか、二人の姉がせつせと裁縫をして居る側へ來てはくだらぬ事を言ふので、姉達にまぜつ返へされたり、愚弄はれたりする



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のを口惜しがつて居る位が一日のお役目なのである。嫁に行つて居る姉などは來る度に「秋子を遊ばせて許り置かずに裁縫の稽古にでもやつたらば。」と氣にするが、何んとか、彼とか、理窟をつけては其度毎に母親は言譯する許り。

之が又家に居る二人の姉達には癪に觸つてたまらないので、詰らぬ事にも大袈裟に秋子に愚弄つて口惜がるのを見て少しは溜飮を下げて居た。然し秋子とて中々强情者だから姉さん達に敗けては居ない、時によると中の姉と立ち廻りさへ始める事があるが、結局二人掛りの姉達には適はない。濱子が我子の樣に可愛がつて居る猫を目の敵の樣にして嫌がる蚤を取つて腹癒せをするのだ。猫も嫌がつて秋子の側へは決して寄つ付かない。

高い所や一寸眼に付かぬ場所を探し出しては氣持よく寢て居る、滅多に疊の上などでは寢ないのであつた。

猫は秋子を引搔くと高い所へ飛び上つた。中の姉が居たら「赤や出來した〳〵」とお褒め言葉が出る所だが、濱子は流石に無言で裁縫をして居た。

秋子は蚯蚓腫れから出る血を袖から紙を出して抑へたが、中々止まらないので紙が眞赤に染つた。

もう誰れが何んと言つたつて聞くものか、「彼の猫を打ち殺すか、捨てゝ仕舞はなくつては、」と、姉に聞えよがしに言ひながら、足音荒ら〳〵母親の側へ行つた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「母さん、繃帶と絆創膏を頂戴。」と突慳貪に言つた。
「そら御覧、だから言はない事ではない。母さんの言ふ事を聞かない罰だ」。と言つたが其れでも茶簞笥の引出しから兼ねて用意の品を出した。
「マアお見せ！」と秋子の手を取つて膏藥を張つた。
「繃帶にも及ぶまいじやないか。」
「でも巻いて頂戴。」と秋子は半分泣き聲で、「オヽ痛い〳〵」と、騒ぎ立てゝ言つた。所へ髪結ひに行つて歸つて來た中の姉が此有様を見て、
「またやられたの、萬歳！」と嬉しそうに言つた。
「ワッ！」と言つて秋子は口惜相に聲を立てゝ泣き出した。
其の聲に驚かされた赤猫は周章てゝ飛び下りて外へ馳け出して了つた。——完——



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 影―比喩

ポオ

たとひ我れ死の影の谷を歩むとも――ダビデの聖詩。

讀者は常に生の國に住むが作者の私はずつと以前に影の國と歩んで居る筈だ。それは實に不思議な事が起り神密な事が知られやうとも、これ等の記念が人間に見られる先きに幾世紀も幾世紀も經ねばならぬので。然し其が、見られた時、信じない者や疑ふ者があるだらう。しかも尙多少の人は鐵筆を以つて彫られた文字に就て默思すべき多くのものを見出すであらう。

其年は恐ろしい一年であつた、とても人間世界では名狀する事の出來ぬ程、恐ろしいよりも寧ろ感動の一年であつた。と云ふのは種々奇怪な現象が起り、變んな前兆が現はれた



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が、遂に黑い翅を以つて何處も彼處も蔽ひかぶせて仕舞つた恐ろしい疫病は海外迄も響かつた。

星に精通した人々も、決して天が凶事の前兆を現して居る事は知らなかつた。然し特に希臘人のオイノスなる自分には白羊宮の入口で木星が、彼の恐ろしい土星の赤い輪に威壓される七百九十四年の更替期が今來て居た事は明かに分つた。

若し自分の考へが餘り間違はないとすれば、天の特別なる啓示は確かに現れるものである、啻に地球と云ふこの一つの土塊に現れる許りでなく、人類の魂、人類の想像其他深い瞑想に於て顯はれるのである。

トレミイスと呼ぶ薄暗い市の、とある立派な廣間の中に赤きキアンの酒瓶を前にして吾々七人は夜の酒宴を開いた。此廣間には外からの入口は一つもなく、唯名工コリノスが稀代の意匠を奮つた黃銅の扉が内からしつかと閉ぢられて居た。同じ樣に陰氣な室内では黑い掛幕が月をも、蒼白く光る星をも、又人通りのない街をも悉く吾々の眼から遮つて居る。然し凶事の兆や、記念はさうは蔽ひ隱されなかつた。吾々の周圍には種々のものがあつた、物質的のもの、精神的のもの、大氣の中の憂愁、窒息の感覺、懸念など、就中、官能の過敏に働く時、思想の力が潜伏して居る間に、神經が經驗する存在の恐ろしい狀態、とても一々はつきりと數へ上げることは出來ない。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

死の重さは次第に吾々の上に蔽ひかぶさつて來た。吾々の手足の上に、廣間のあらゆる器具の上に、吾々が酒くみはわした其杯の上にまでも。そうして總てのものは欝々として壓迫された。

唯吾々の宴樂の席を照した七個の鐵の燭臺の焔のみはこの壓迫を免れて、細長い光線となり皆蒼白く搖ぎもせずに燃えて居た。七人で取りかこんだ黑檀の丸卓子が燭臺の光に照り返された鏡の中に、私は自身の蒼白い貌と仲間の俯向き勝の穩かならぬ眼の光りを認めた。

然かも吾々はいつもの樣に笑ひ興じた――つまりヒステリー的に、そしてアナクレオンの歌をうたつた――、これ又狂的に、たとへ紫色の葡萄酒は血潮を思はせたけれども尙盛んに飲んだ。

扨其廣間には我々の外になほ他の借り間人なる若きゾオイラスがゐた。彼の屍は經帷子に包まれて延び／＼と横たつて居る、――此舞臺の守護神で、魔だ。ア、彼は苦痛に歪んだ其の面貌の外は吾等の宴樂に對して少しも仲間にならない。

死のために只疫病の火を半ば消された其の眼は、死人が恐らく死に頻して居る人々と喜びを共にする樣に、吾々の觀樂に同じく興味を有つて居るやうに見えた。併しオイノスなる自分は此の死人の眼が自分の上に注がれて居ると感じたけれども、なほ其眼の忌はしい



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

表情を會得しない樣にわざと努めた。で、黑檀の鏡の中をぢつと見下しながら、テオスの子等の歌を朗々と聲高く唱つた。然し次第々々に私の歌は止んだ。歌の響は室內の黑き掛幕の間に漂ひながら、やがて弱く微かになり、聞き取れぬ樣になり、かくて遂に消え失せた。

おゝ見よ！、見よ！、歌聲の消え去つた黑い掛幕の間から、驚くべき黑き朦朧たる影は前へ動き出した。大空高くまだ登らない月が人間の姿から思ひ付いたやうな影。だが其は人の影でもない。神の影でもない。且又目なれたものゝ影でもない。

室の暗闇を暫く漂つた一團の影は遂に黃銅の扉の表面に充分認められる樣にはつきりと止つた。併し影は朦朧として、形なく、定りなく、人でもなく、神でもなく、乃至はギリシヤ、カルデア、又はエヂプトの神でもない。

影は眞鍮の戶に、其長押の弓門の下に止まつて動きもしなければ一言も發しない。しかも遂に其處にぢつと止つて仕舞つた。自分の記憶にもし誤がないとすれば影が止つた其戶は經帷子に蔽れた若きオイラスの足と向ひ合つて居た。

併してゝに集る吾々七人は黑い掛幕の間から影の來たのを見た時、敢て其を見詰めやうともしなかつた。併し伏目になつて黑檀の鏡の底を見詰め通した、オイノスなる自分は遂にいくらか低い聲で影に其住家と姓名とを尋ねた。「我こそ影と呼ぶものの住家はトレミイス



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の榮窟に近きあたり、いまはしきカロニア溝渠に境せるヘリニージオンの薄暗き平野に近きあたり」と答へた。

七人は恐れの餘り椅子を蹴つておどおどと叉わなわなと震へながら仰天して突立つた。影の聲音は人一人のそれではなく、恰も一團の人々のやうに。そして一言は一言と其抑揚を變へて吾々の耳を死んだ數知れぬ友の思ひあたりのある親し氣な調子で無氣味に襲つたし

――完――



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 喜劇 陽神の戯れ

荒木郁子

## 第一場

### 人名

晴雄　學生　二十二歳
浦子　晴雄の許嫁　十八歳
守也　會社員　三十三歳
美子　守也の妻　二十四歳
他に
百合姫、第一の侍女、第二の侍女、第三の侍女、

### 時と場所

或る山中の荒地、四方から深く立込んでゐる樹木が屋根のやうに被さつて居る、眠の底

く限り一面に、薔薇鉄百合など、美くしく色彩られてゐる。然し、カーテンの上げられた時は、初夏の曉方――午前四時頃――であるから、舞臺一體に冷たく薄暗い心持。從つて總ての色彩は殆ど各自の個性を失ひ、一様に溶合つて居る。

山蔭を微に水の流れる響が聞えて來る。

美子。（身丈高く、優れて美くしい女、眼に温味の缺けた女、華美な服裝。右手から顔を顰めながら出て來る。）あーあ、足勞た、足勞た。（嘆息）何だつて私は恁那山奥へ來たのだらう、晴雄さんは私を恁那場所へ引張つて來て奈何する氣なんだらう。（間）來なけりや好かつた、私は山奥なんかに住む女ぢやないのだ、何も山の中なんかに住まうとつて晴雄さんに戀したのぢやない。考へて見れば私も隨分好人物だつたわ。あゝ莫迦らしい、何方を眺めても木と山許り。（間）だが彼の人は眞個に奈何して居るのだらう、あんな弱い足なら初めつから來ないが宜いんだわ、（間）いや直きに歸りたくなる、ひよつとかすると、もう今頃は心の奥底でそんな秘密を、希望を、訴へて居るかも知れない、まだ言葉に出して云へない丈嘸胸の中が苦しからう。（冷笑）全然蛇がのたくるやうに、ぐづら〱してゐて……加之に私の世話迄燒くのだもの、大抵な苦勞ぢやない。（稍々長い沈默。ふと寂しさに襲ばれたといふことなし、烈しく身を震はす。）晴雄さん、晴雄さあん。

晴雄。（――間――山蔭から）其邊で一休みしませう。そんなに急がないだつて宜いぢやありませんか。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美子。（突立つたまゝ身を動かさないで）私はもう足勞て居ますの、どうせ歩けつて仰有つたつて歩けやしませんわ。（仰山に）あゝ疲れた、疲れた。もう足でも手でも持つて行かうと云ふものがあつたら、皆遣つちまひたいわ。

晴雄。（山蔭から）美子さん、貴女が餘り急ぎなさつたから疲れたのでせう。ね乾度そうですよ。

美子。だつて又、貴方のやうに足の遲い人も有りませんわ。

晴雄。（右手から登場。山を降りてきた心持。女持の傘、毛布、提鞄などで全身を掩うて居る。年齢よりは稍老けてみえる。亂れかゝつてゐる長い髮の下から白い額が覗いてゐる。それ程額は狹いけれど黑く澄んだ眼射と、通つた鼻と、紅い唇からは若い女の心を奪ふ強いものが流れてゐる、弱々しいが何かに觸れると、平常の習慣を破つて了ひさうな氣質。いたく疲れた樣子。莞爾やかに美子の側に寄り優しく勞はる。）疲れたでせう、隨分歩きましたものね（毛布を草の上に敷き、手提の中から葡萄酒の瓶を取出して美子に飲ませる）。これを飲んで、いつもの貴方の元氣を出して下さい。

美子。（毛布の上に座る、多少感情の讓歩を示す。）何だかねえ、道々呼吸が詰りやしないかと心配しましたの、あんまり驅けた故かも知れませんわね。私苦かつたのですわ、もうそれは大變に。

晴雄　左樣でしたか、僕は毫とも知らなかつた。そんな時は何時でも僕に云つて下さらなくては不可ません。でないと氣が附かずに、ずん／＼歩いて了つて、後から頭が痛く



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつたり、胸がむかついたりしては困りますからね。（覗込むやうに）今でも未だ不快ん
ですか。
美子。いゝえ、もう全然。
晴雄。そんならよいが氣の毒な事をしました。（美子の手を取り）一緒に疲れたのだから、一緒に癒さうぢやありませんか、ねえ美子さん。（美子の手に接吻する）もう全然癒つたでせう、ね、もう今度は好い筈だ。
美子。又今日も山の中に寢なければならないのですか。
晴雄。えゝ（間）山の中は厭ですか。
美子。（淡々と）いゝえ。
晴雄。ぢや宜いぢやありませんか。私達二人居れば、怖ろしい事も氣味の惡い事も有りません。草を褥にし、お月樣を天井に頂いたつて樂しい時を送れます。私達は他のあらゆる煩さから超越して居るのです。何者の侵入をも許さぬ强い力が虹のやうに二人の身を包んで居ます。戀と云ふ力。是れ程强い力のあるものは、現世に二つとはありますまい、ね、美子さんはさうは思ひませんか。
美子。思はない事もありません。
晴雄。左樣でせう。僕は何故斯んな幸福を享る事が出來たのでせう。僕はもう嬉しくて



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

〱堪らない。あらゆる女性の中で特に、貴女を、美くしい貴女を與へ給はつた神様に、感謝の辭を捧げなくてはならない。（跪いて禮拜なしようとして）それよりも貴女に、（美子の兩手を取つて見入る）

美子。（少し五月蝿さうな氣味で）私は奈何も貴方のやうに幸福を感じる事が出來ません。と云ふのは山の生活（問）私には如何にも住み慣れないせいか、歩き馴れないせいか、堪へられさうにもありませんの、

晴雄。そりや、僕だつて山の中にや住み慣れては居ない、けれど夫れはお互に前以つて覺悟があつたんぢやありませんか、なに、これ許りの事で挫けちや詰らない、こんな小さな事で考へるやうぢや仕方がない、さ、お互に戀の力といふものを、しつかり掴んで居ませう。而したら何も案じる事も、くよ〱する事もないといふものです。ね、左樣ぢやありませんか。

美子。だけれども、貴方は眞個に、一生涯此の山に住むおつもり………

晴雄。（不審さうに、美子の顔を見守ながら）左樣です。

美子。これ程思ひ切つた事を、貴方がなさらうとは思はなかつた。今でも未だ信じられません。奈何しても私には信じられませんの、晴雄さん、貴方は此寂しい山の中に一生をお送りなさるのですか、見る限り、山と木許り、聞えるものは、風の音、鳥の聲、

光のない、艶のない、町の響の聞えない、暗い杜の中なんかに、若さといふ幸福を埋めてお了ひなさるのですか。

晴雄。私達は此の暗い杜に咲く美くしい百合だとは思ひませんか、靜かに人知れず咲いてゐる百合は幸福なものです。ソロモンの榮華の極の時にだつて、此の花のやうな幸福はないと云ふぢやありませんか、それ程、幸福者の百合と、私達とは同じなのです。人は見ない、知らない、けれど張切つた美くしい滿足の情は迚も現世の人の味へない程度に私達の周圍を包んでゐます。ね美子さん、（間）それに付けても其の滿足を與へて下さつた貴女に感謝をせねばならない。

美子。そんなに仰有ると私困ります。歸れなくなるぢやありませんか。

晴雄。（烈しい驚の色）えつ。歸るつ。

美子。（極く平氣に）えゝ私考へて見ると、何だか大變に心細くなるのよ、こんな山の中で若しか病氣にでもなるとしたら…………

晴雄。（稍安心したやうに、輕く笑ひながら）何だ、そんな事、子供のやうぢやありませんか小さい子供か譯の解ない人の云ふ事ぢやありませんか。そんな心配なら私が獨りでします、萬一も貴女が病氣にでもなるやうな事があれば、其時こそ、どんなにしても看護をします。鳥渡だつて苦しい思や、悲しい氣持なんかさせるものですか、…………それと



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も僕では不足なのですか、僕ぢや物足らないのですか、え。

美子。さういふ譯ぢやないのですが…………此所は隨分暗いわね。

晴雄。未だ陽が上らないからでせう。（間）もう直きに明るくなります。吃度、こんな薄暗い雲は私達の眼の屆かない處へ行つて了ひます。だから貴女の浮かない氣持を此の雲にお預けなさい、悲しい事や、厭な事はみんな、此の雲にお預けなさい、而して二人で祈りませう——此の山に來る日、美くしい旅につく日、あの夕暮方に二人は祈つたぢやありませんか——神樣は私達小さいもの丶願を聞いて下さる方です。僞のない言葉は、例も神樣のお喜になる事です。さ美子さん。

（太陽、あか〳〵と華やかな裝て上手に現る）

晴雄。あらつ奇麗つ。少つとも僕は知りませんでした。美子さん、何時あの奇麗な太陽は上つたのです。え、まあーあの美くしい陽の色、貴女のお心のやうに光り輝いて居るぢやありませんか、二人丈の爲めに陽は山を照すのです。二人の希望と幸福とが彼の空に輝いて居るのです。ね、丁度其のやうぢやありませんか。（嬉しさに狂う許り）美子さん、二人の幸福な影に向つて祝の歌を歌ひませう。厭な國から遁れて來た二人の爲めに祝の歌をうたひませう、陽に向つて、さ美子さん、祝ひの歌を、而して幸な祈を、

…………



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美子。（晴雄の側に近寄りながら）あー何だか狐にでもつまゝれて居るやうだ、私どう考へたって
そんな夢のやうな氣にはなれない。

晴雄。（美子の獨語には氣づかぬ體、唯、喜悦（よろこび）の爲めにわく〳〵して居る）僕は何て幸福者（しやはせもの）なのだらう。

美子、晴雄の兩人、上手に向ひて跪く。

靜かな音樂と共に、舞臺段々暗くなる。（ダークチエンジ）

## 第二場

百合姫の居室。何世紀かを經たかと思はれるやうな古い室、崇高でめまぐろしくない飾附。上手床、並に珍奇な置物掛物など適宜に配置されてゐる。正面は古風な格窓――午前十時頃であるから、樹木を透した陽の姿が小さい窓の傍に、倚りかゝつてゐる。――一段下つた所に侍女等の控へる場所がある、同じく下手に出入口がある。此場は幻影なのであるから、總ての色、音などは、飾りけばけばしくならぬやうに。

百合姫。（最も容姿の麗しい女性。百合模樣の衣服、同じ帶、髮を下げ、少し上手寄に正面に坐る。左手に脇息（きやうそく）、百合の花束一、右手に百合の花、紙、白赤のリボンなど花束を造るに必要な品々が置かれてある。）何か面白い話



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はないかや。
第一の侍女。（夢のやうな、おつとりした色の着物、似よりの帶、）おな退窟事でムります。
第二の侍女。（第一の侍女と同じ着物。）昨日の雨に引かへて今日は又何といふ晴々したお天氣でムりませう。（間）今日の花束は大變にお美しく出來ました、ほんに我々共許りで拜見致すのは惜しいやうに思へまする。
第一の侍女。して香の高い事………
第二の侍女。今朝咲き揃つたの許りを集めたせいかも知れませぬが、此樣に香りの高い事は稀でムります。
百合姫。色もよいわ。
第一の侍女。此樣に、好う出來ましたのを私共許りで拜見致すのは、誠に惜しいやうに思ひまする。（何か思ひ出したやうに）姫樣、今宵は十五夜のこと、この雲摸樣では、雨などにはなりさうにもムりませぬ。久し振りで皆の者をお召しになりましては如何でムります。面白いお話を致しまする、
第二の侍女。してお好みの曲でも奏でさせましたら………
百合姫。面白からう。
第二の侍女。久し振りのお酒盛を此の廣い庭でなされましたならば一層興深いことでムり



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ませう。

第一の侍女。而して、あの泉の酒をお手づからお掬ひなされましては………

百合姫。面白い、おもひつきぢやなう。

第一の侍女。その折には、私がもう面白い、それは〳〵誰れも知らない變つたお話をいたしまする。

第二の侍女。それならば私は、それは〳〵面白い、誰れも聞いたことのない音樂を奏でまする。

此時第三の侍女、少し周章氣味に下手より登場。

第三の侍女。申上げまする。

百合姫、何ぢや。

第三の侍女。只今私は見なれぬ女子に出遇ひました。(怖ろしいやうに)髮を逆て、聲さへ震はして、何やら人の名を叫んで居りました。

第一の侍女。まあ、それは何處にて厶ります。

第二の侍女。どんな風姿して。

第三の侍女。姫様のお居室の前を右へ通つて往きました。

百合姫。それて………



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三の侍女。ちらと見ましたから追ひ駈けて參り、其方へ行つてはならぬと確と申付て置きました。その時、其の女子は手を合せて申しまするに、『隱さないで何卒會せて下さいませ』と恁う申して居りました。

百合姬。連の者を見失つたのかも知れぬ。して何方へ行つたかや。

第三の侍女。私は知りませぬ。たゞそちらへ行つてはならぬと恁う申したまゝ直ぐに此方へ參りました故。

第二の侍女。その女子はどんな風姿でした。

第三の侍女。暗い女でした。美しい聲は、何の爲めか烈く慄へ、奥深い眼は、釣上つて（間）大變に窶れて居りました。

第二の侍女。未だ其邊に居るでムりませうね。

第一の侍女。果て、それでは、その女子の連らしい者に遇ひました。

第二の侍女。えつ何處で

第三の侍女。男でムりますか。

第一の侍女。先程、姫樣の泉のお酒を掬うて居るものがありました。それは見知らぬ男でムりまする。

第三の侍女。（冷笑的に）あの泉の酒を………



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一の侍女。盗んで居りました。
第三の侍女。何て莫迦な男てムりませう。俗人がいくら掬ふたとて、手の底は愚か、一滴だとて口の端にも入らぬものを。知らいて、致した事てムりませう。
第一の侍女。眞然そうらしうムりました。何と憎い男てムります。
第二の侍女。ほんに太い奴原。つかまへて、戒しめてやつても宜しうムいます。
第三の侍女。（第三の侍女に）左樣なこと仰せられますな。知らないで致したと思へば可憐しうムります。その女子と、その男とが連の者であれば幸ひ、見つけてやつて二人とも會せて喜ばしてやりたいものでムります。
百合姫。ほんにさうじや（間）何か仔細あつてこの山に來た者共かも知れぬ。探して遣りたいものぢや。
第一の侍女。では私がめつけて參ります、
第三の侍女。私は其の女子をめつけて參りますゆえ、（第一の侍女に）汝は男をめつけてお出でなされませ。
百合姫。早ければ未だ其の邊に居るであらう。
第一の侍女。直ぐに連れて參ります。
第三の侍女。御免を蒙ります。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一の侍女、第三の侍女退場。

第二の侍女。如何な人達か早う遇つて慰めてやりたいものでムります。

百合姫。ほんにさうぢや。

第二の侍女。互に探し合うて居た人々だと宜しうムいます。

百合姫。（花束の一つを遣へ上げ左手に置き）此の花束をやつても能いやうな人達であれば好いなう。

第二の侍女。嘸かし喜ぶ事でムりませう。何に致しても早う參られゝばよい、何といふ待遠な事でムりませう。

第一の侍女、第三の侍女、浦子、守也の四人下手より登場。

浦子。慎ましく輝いてゐる眼は、穢れのない小女の眞を現すに充分である。けれど、小さい額を掩ふ暗い影は、羽のぬれた、寒さうな小鳥のやうに、ぢつとして浦子の身體に喰みついてゐる。）え、何處に、え、何處に、（悲しいやうな聲で四邊を見廻す。）

守也。（訝しさうに、浦子の容姿を見ながら、侍女等と並て坐る。）あの泉は、飲んではならぬのださうで

第二の侍女。其のお咎めはありませぬ。近う寄つて、汝の名前を申し上げたが宜からう。

浦子。晴雄様。晴雄様。え何處へ、

守也。妻を訪ねて此山迄來つたものでムります。守也と申しまする。

百合姫。それは宜う來られました………然し、妻女を訪ねて………

守也。申上げるのもお愧かしい次第でムりますが私の妻は突然居なくなりました、

百合姫。で此山に來られたのかや、

守也。左樣でムります。した處、歩き疲れて咽喉が大變に渇きました。それで幸ひ泉がみつかりましたので掬はうとして居りました。

百合姫。いや／＼そのやうな心配は要らぬ。（間）ぢやが此の婦人は。

守也、一向に存じませぬ。

浦子。晴雄樣。貴方は何故私を置いてきぼりになさいました。晴雄樣、貴方は何故行つて終ひなさつたのです。え、私は貴方の名を呼びながら三日三夜歩き廻りました。けれど、答はありませんでしたの。長い山の旅の間、私の木の葉のさゝやきと、蟲の歌とを聞いた丈けです。遇ふもの／＼私の辭に一言も返事をしては呉れませんでした。青い杜の衣服は冷めたうムいました。そう、私の身の周圍には、知らない人許りですわ。

百合姫（浦子に）汝の名は。

浦子。（哀しげに）うら子。

百合姫。此所へはどうして來られたのかや。

浦子。黒い鳥が翼を擴げて私の頭の上を、そうッと包んで守つて居て呉れました。（空を熱



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

視て狂ほしさうに）それで私は、其の鳥のおいでといふ方に許り歩いて來ましたの、けれども晴雄樣は見えません。晴雄樣に遇ふ事は、出來ませんでした。オヤッ。（急に何か聞えたやうな容姿。）晴雄樣、晴雄樣。（二三歩行つて立ち止り）。貴方のお名は慕しうムいます。其の聲は、私の耳に世界の音樂といふ音樂から撰り取つた一番佳い音よりも氣高く、懷しいのでムいます。（耳を欹てゝ）あら駄目、駄目（間）オヽ厭や。厭や、物の聲の聞えぬ國へ行きたいつ。音のない國へ。何んにも思はないで、何んにも聞えないで、睡り許のやうな國へ。

第二の侍女。尋ねる方を早く見つけて上げ度いものでムりますわ。

守也。何處に彼來る方か知らないが、恁う氣狂しく迄なつて訪ね廻つてゐる優しい方を置いて行くといふ人も隨分ひどい方だ。

第三の侍女。訊いて見ればほんに氣の毒な方です……　人の心程自由にならぬものは、ありませぬ。

浦子。（第三の侍女の側に寄り云はすまいと手で仰へるやうにして。）何の、何の人の心程自由なものはありませぬ。眞が人の心に喰みついた時、世の中のどんな強い力だとて叶ふものですか、人の心は空ゆく鳥のやうに自由でムいます。神樣から頂戴いた美くしい、心といふ鳥に、眞といふ強い翼をつけて、世の中を飛び廻つて御覽なさい、どれ程面白い事でム



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りませう。（フト立上り守也の顏を熟と見て）貴方ね、神樣から與へられた翼を奧樣の被在る處へ投げて上げる氣はありませんか、眞面目な心持で奧樣を御呼びになつたらどうですか、え、山の奧でも海の底でも、貴方の思てゐる方へ奧樣の爲めに、强い翼を送るといふ氣はなくつて。女の心は美しいものですわ、少くとも男より劣つてはゐませんもの。だから其の人を迎へる爲めに貴方眞面目な心におなりなさい。今のまゝの貴方が續くと、萬一女がめさめた時に、貴方の立場がなくなりますよ。貴方が奧樣を探し當てたにしたところで、貴方は不幸な一生を送らねばなりません。（調子漸時に亂れてゆく。）けれど私もわからない、どつちが眞面目なのでせう。どつちが眞なのでせう。私にはけじめがつかなくなつた。私は眞の聲の屆かない國は無いと思つて居ました。私の聲の屆かない國はないと思つたけれど……黑い鳥よ、黑い鳥よ、私を連れて行つて呉れ。汝の好きな國へ、（間）さうぢやない〳〵。私は行く所があるんだ。私はお嫁にゆくの山を越え、川を渡り、三日も四日も步き廻つてね、お母樣、私と一共に被來しやいませんか、私はお母樣を置いてお山へ來ましたの、お母樣、あら御母樣、（悲しさうな聲）お母樣よう。

第二の侍女。（浦子の側に泉の酒を持ち來り飮ませろ）さあ召し飮りませ。これを召すと、氣分は全然癒りますの、そして頭の重いのも苦しいのも、みんな忘れたやうになります。さ、



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お氣を確りなさいませ。

浦子。（一口飲みて）おやつ此所は陽の山ですわね、陽の山ですわね。美子さん。美子さあん。（第二の侍女の肩に手をかけ）ね美子さん私は恨みはしないわ、又そんな筈はないけれどもね、貴女自分に自分を僞つては被來しやらないでせうね、自分を僞るといふ事は、一番怖ろしい事ですわ。

守也。貴女、もしか美子を御承知で被在るのですか、此の山に居る私の妻を御承知ですか。

浦子。（守也の詞には氣附かぬやうに）貴女ね人の心を弄ぶなんていふ事はなさりはしますまいね、私の友人の貴女が、萬一そんな事をなさつたら私は許して置けません。萬一不幸にも私の思つた事が事實なら私は、私は、戀人の爲めに戰ひませう、それから貴女といふ私の友人の爲めに、美子さん。戰ひませう。貴女の怖ろしい、厭な意地と、私の眞の心とどつちが勝つか……疲れて、疲れて、羽のしほれる迄。翼のビシ〳〵に折れる迄。

第三の侍女。烈しく荒んで被來る。（側によりていたわる）さ、これをお飲りなさい、而して氣を確りと。

浦子。有難う。甘しいわ、（空しい笑い）私甘しいの、ほら〳〵來ました黒い鳥が、私を連れに來た。私を連れに、たつた獨つきりの私は小さくなつて、下向いて歩きませう。淋し



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い——淋しい——淋しい、私はたつた獨つきりよ。

第二の侍女。さ、もつと御飮りなさい、これをすつかり飮むと、氣が晴々しますの、召飮れ。

守也。貴女美子を御存じなのですか、御存じなら居る處を知せて下さい。

浦子。此の山の中に、

守也。何方へ行つたら遇へませう。

浦子。眞面目な心でお探しなさい、私のやうに此の山中を訪ねて御覧なさい。私は、胸の中の血が疲れて動かなくなつても、私の行く前にどんな大きな石があつても、自分で途を造らへながら歩きますわ、陽の山の此所です。私の探す山へ入つてから挫けるなんてそんな筈はない、私は自分で自分の足を撫でながら歩きますの。

百合姫。（兩手に百合の花束を持ち立ち上り）浦子どの、汝の途は開けて居りますぞ、汝の心の糸は、今靜かに解けましたぞ。さ、此の花を兩手に持つて妾のあとを、ついてお出でなされ。

（花束を浦子に渡す）天は眞を取りあげて下さるのぢや。

浦子。（兩手に花束を持ち高く捧げて、喜に堪えぬやうな容子）有難うムいます。

（ダークチエンジ）



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 第三場

第一場と同じ背景――其儘の續てあるから、美子も晴雄も第一場の終りのまゝの姿
――晝近い陽の色である。

晴雄。（放心してゐる人の眼の前に、羽虫でも飛んで來たので何かなしに我に返つたといふやうな氣持）何だか睡
いやうな……妙な氣分だ。

美子。（第一場に現れた時より稍々確りした落着と覺醒の氣分を持つ）睡りはしなかつたのだ、確に睡はし
ない。（間）だから夢ぢやないのだ。

晴雄。（晴れやらぬ風で）どうも可笑しい、夢でないとすると。（考へ込む）

美子。確にさうだ、神樣の試、試。さうに違ない、あゝさうなら私は恁うしては居られな
い、私は自分を僞つて居たのだ此の怖ろしい試には堪へられない、然し夢であつたの
かも知れない。（半信半疑の體）

晴雄。どうも變だ（間）夢であつたのなら、醒めなきやならない、それとも今が醒めた時な
のか、（四邊を見廻し美子のゐるを始めて氣附いたやうに）美子さん、私は今睡つてゐましたらう
か、それとも、此所に誰れか見えましたでせうか。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美子。私も今考へて居ますの。

晴雄。僕は不思議な夢に出遇つたやうな氣がする。

美子。私は神様から、よいお訓示を受けたやうに思ひますの。

晴雄。訓示……さう、さうも云へる、さうかも知れません。

美子。でね、私家に歸らうと思ひますの、どうしても私は、家に歸らなければならないのですわ。

晴雄。今神様にお約束した許りだのに。

美子。今日といふ今日は、私判然と自分の心を見ました。偽りのない自分は此山に居られないのです。

晴雄。たつた今誓つた言葉を貴女は、よもお忘れにはなりますまい。

美子。忘れはしません。確に誓ひました。

晴雄。それでも貴女歸らうと仰有るのですか。

美子。えゝ私歸ります、神様を偽るより、自分を偽つた方が恐ろしい事ですわ、自分を偽るのは神様を偽るのです、して見れば、私今迄二重の偽りをして居ました。何といふ怖ろしい事でせう……と云ふのは、私は山の生活といふ事は好まないのです。貴方と二人つ切りの淋しい生活、私はどうも厭なのです。適して居ないのです。尤もそ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れは、今始めて氣附いたといふ譯ではないのです。知りながらも私の好奇心は私の脊を打つて吳れました。自分を振り向いて考へる力よりも、好奇心の方が强かつたのです。(同)けれどもう駄目です。

晴雄。(稍々頭が纏つたといふ風に)おや貴女は、好奇心で僕の後をつひて被來しつたのですか。

美子。好奇心で……まあそんなものですね。私は貴方の世間から離れた一人切りの淋しい處を、氣分を、拜見したかつたのですわ。それからも一つは、私の周圍を包んでゐる世間の種々のうるさいものから鳥渡離れて見やうといふ氣になりました。

晴雄。おや貴女は、戯れに戀を爲さつたのですね。好奇心と、鳥渡した氣持とで貴女は、僕を、弄みなさつたのですね。貴女は戀を粧はうて、而して僕は、その粧に欺されたのですね、此の弱い、小さい僕を貴女は、小猫が鞠をころがすやうに、ぢやれて見なさつたのですね。

美子。そうね、今の立場から考へると、そうも云へますわ、そう仰有つても私一言もありません、けれど私……それ程判然した氣持でなかつた丈け悔しいのです。私が小猫で、貴方が鞠。私は莫迦だ、幸福な事をしながら知らずに了つた。たとへ三日にしろ四日にしろ、貴方の仰有る小猫であつたら私はどれ程幸福者でしたらう。私は面白い遊戯を取り逃したのですわ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴雄。取逃した……

美子。自分の心のまゝに人を連れて來たり、左樣ならをしたり。何て面白い戯れでせう。

私は夫れを取り逃しましたわ。

晴雄。捕へる氣はありませんか。

美子。もう駄目。いえ／＼さうでもない、私は其の爲めに此の山を下りるのですの、人はみんな判然して居ますわ。自分の思ふやうに働いて、自分の思ふやうに樂しんでゐます。私は人の享けてゐる幸福は眞面目によつて得られるものだといふ事を知りました。（間）私が貴方と一緒に此の山に來る道すがら、幾度歸らうと思ひましたでせう。幾度引返さうと思つたでせう。けれど貴方にお氣の毒だといふやうな、二人の爲めに役にたゝない遠慮から貴方の後を跟いて來ました。折角樂しまねばならない、一人舞臺を、私はむざ／＼詰らないものにして了ひました。さ、もう私は眼が醒めたのですから、明るい町に歸ります。世間のまんなかにもぐり込んで面白い事をして、自分のために樂しみますわ。私、今日から自分のために生きるのですもの、而して種々な聲や姿を見ますわ。私には電車の軌る音だつて、豆腐屋のラッパだつて、それから子供の泣聲だつて、……夕方集まつてくる澤山の物音は、私を晴々しい氣持にしてくれます。行きませう、烈しい街の聲の聞える處迄。



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴雄。ゝ、よく解りました。お互に此山へ來ようと相談の出來上つた頃は子供でした。僕が貴方を知らなかつたやうに、貴女も僕を知らなかつたのだ。

美子。さうよ、二人の考へが淺かつたのですわね。

晴雄。（いら／＼して堪らぬといふ風に、行きつ、戻りつしながら）僕が惡かつた。ゝ、もう今更、愚痴の洩しつこしても仕方がないから、これで別れませう。

美子。それが一番いゝわ。そして二人のためにそれが一番幸な遣方ですわ。

晴雄。（烈く熱して）上調子な笑と、棄鉢な世渡りとは僕は嫌です。僕の世界は、つゝましい小鳥のやうなものゝ許り住むところです。貴女は異ふ世界の人です。

美子。異ふ世界の人……さうです。貴方の仰有る通りですわ。

晴雄。おや僕は御送りしませんが宜うムいますか。

美子。えゝ何卒も其のまゝにして下さい、さよなら。

晴雄。御機嫌よう。

美子退場。晴雄默したまゝ美子の後を見送る。暫時沈默

晴雄。（ぐつたり足下の木株に腰を掛ける）二十二年の長い生涯を送つて來た自分、いくらか世間の色は見分けらるゝと思つては居たが、何も彼も解らない、解つたと思つたのは自分丈の想像であつた。何も解らない。夢の中を浮いてゐたやうなものだ。此山に登つたのも



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家を離れたのも、皆、自分以外の或者が、自分に命令をするので、その云ふがまゝに從つて來たのかも知れない。噫々自分には奈何しても、さうとしか、思へない。夢の中で知らない人を見た。又、浦子さんの聲も聞いた。知らない人達の訓示を受けた。何でも彼でも煙のやうた。憧々登つて來た新らしい生活、波のやうに押寄せて、波のやうに逝つて了つた。取返のつかない遠い國へ行つて了つた、(間)けれどこれは偶然ではない。決して、偶然ぢやない。(自分自身を恨むやうに)考へて見れば自分が造つて來た仕事だ。知らず、知らずの間に自分が造つて來た仕事だ。その過去が姿を變へて、今眼の前に現れたのだ、淺ましい、淺ましい自分の手には何もない。確り摑んでゐるものは何もない。空手だ、空手だ。(いら／＼した樣)空手だ。

晴雄頭をかきむしりながら、四邊を歩き廻る。此時、浦子活々した樣子にて花束を兩手に持ち上手から登場、けれども晴雄は氣附かぬ體

浦子。晴雄樣。晴雄樣。

晴雄。空手だ。自分の淺果敢な姿が現れてくる、怖ろしい。

浦子。晴雄樣。

晴雄。(烈く驚いたやうに聲のする方を向く)あつ。

浦子。(急いて近よらうとして踏みしめる)晴雄樣、あゝ私は漸くお目にかゝれました。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴雄。浦子さん。（元氣なくうなだれる）

浦子。嬉しい。私嬉しい。

晴雄。（落着て）浦子さん貴女どうして、此所へ被來しつた。こんなに淋しい山の中に、

浦子。貴方を探して、

晴雄。僕を……

浦子。貴方を訪ねて長い間、睡りもせず、休みもせず……

晴雄。（手を振つて）許して下さい。貴女が此の山に來るのにどれ程苦しい思をなさつたといふ事はそれはもうよく解ります。浦子さん何卒許して下さい。（怖ろしいやうに）僕の云ふ事を一々信じて下さい。僕は今眞心から貴女に謝ります。許して下さい、

浦子。私に……貴方が私に謝る。こんな事はありませんわ。私唯貴方にお目にかゝれゝばそれで滿足ですの。而して少しお話をする時間を與へて下さりやもう、私現世に何も望みませんわ。（見廻して美子の居らぬに不審を持つ）私少し此所に居てもよろしいのですか。

晴雄。えゝ何時迄も、……　貴女が一分時でも、餘計に居て下されば僕は幸福なのです。さ、御話なさる事がお有りなら何でも聞きます、聞いてから僕は全然お詫をします。

浦子。私三日の間、毫とも休まないで來ましたの、一分でも休まずに、一分でも睡らずに。輕はずみな考て此所迄來たのではないといふ事を承知して頂戴かなければなりませ

ん。それから、此花束を特に貴方に、納めて頂戴かうと思つてゐるのです。——これは、私に取つて紀念の深い人から贈られたのです。——ね、受けては下さいませんか。

晴雄。僕は喜んで戴きます。

浦子。（晴雄に花束を一つ渡す。）眞面目であつたと、も一度云ひますよ。私は、眞面目に貴方を戀してゐたといふ事を、貴方一人丈けに私の口から御話したいのですわ。今迄私は、一度もさういふ事を申上げた事はない、隨分御一緒に散歩もしました、お話も致しました。けれど、私が貴方を戀してゐると打明けた事はありませんでしたわね。と云ふのは、お互の間はもう定められてゐると思つてゐましたから、私達は一生涯、一緒に住む事の出來る間柄だといふ意がありましたし、世間でも、又、私達の親達でも、認めて居て呉れましたからですわ。けれども事實は、全く違つてゐました、私の考へてゐた事や、樂んで居た事はみんな、夢でした、夢でした。親達の定めた間柄は、私達若者の爲めにはならなかつたのです。私は恨みに來たのぢやないから、もう、くど／＼しい事は云ひますまい。たゞ貴方に云ふのは、貴方を戀してゐた女があつた。而して今も戀してゐる、といふ事を、判然と御報せしたかつたのです。

晴雄。僕はもう何と云つてよいか解らない。唯、自分から出た事が自分に戻るといふ事を知りました。僕は何でも宜い、浦子さん何卒僕を貴女の思ふ存分にして下さい、てな



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いと僕は苦しくつて堪らない。

浦子。そんな事を仰有つちや不可ません。私は貴方を苦めに來たのぢやありません、私は、貴方がそんなに苦しみなさるのなら來てはならないのだわ。私が戀してゐる人の苦しむことは鳥渡でもしてはならないのですから。私歸りますわ。

晴雄。待つて下さい、僕に許すと一言仰有つてから歸つて下さい。

浦子。許すつ、許すつて、私に對して萬一もそんな考へて彼在るのなら全然、打棄つて下さい、私は貴方を僞つたり、欺いたりするやうなことは一生涯ありませんわ。

晴雄。眞個ですか。

浦子。私はお目にかゝつた丈で滿足してゐますす。其上に思ふ事も云つて了つたし………

晴雄。浦子さん。

浦子。はい。

晴雄。僕の云ふ語を信じて少し聞いては下さいませんか。

浦子。聞きませう。

晴雄。僕は、美子さんと此出へ來たのです、樂しい生活をする心算で、世間の煩さから離れて、眞の生活は淋しい山の中にあるのだと思ひましたから。(間)けれど其れは悲しい終を告げました、そして僕は好い敎訓を受けました。貴女の美くしい御心に縋りた



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いのです。貴女の外に誰も、、、もう救つて呉る人はありません。
浦子。貴方の苦しい時には、私が救ふのです。私丈が………
晴雄。さうだ、實に貴女切りだ。
浦子。分りました。私に任せてね、私がみんな庇つて上げますわ。
晴雄。有難う。貴女は僕の救主だ。
浦子。安神してね。貴方の喜は私の喜です。
晴雄。浦子さん。（喜びに激したやうに、身體を搖る）僕は安心が出來ました。
浦子。さ一緒に歩きませう。………天は私の眞心を聞いて呉れました。人の眞程力の强いものはありません。
浦子。さうですわ。眞實は最後の勝利ですわ。

（幸福を祝ふ華美な音樂と共に幕）



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 磯のひる

淑子

磯のひる砂に射返る日輪の光りに眼閉ぢて佇む

去にし年君と遊びし砂山に我一人立ち浪の音きく

如何なれば物思ふ子となりにけり君と相見し初夏の頃

赤らみし桃盗む子は憎みつゝ人妻をしも戀ふと云ふ人



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夫あれど夫し思はず自からの作りし戀の幻を追ふ

かくて遂に沈默（しじま）の森に君と我れ詩と意地に胸あはて死ぬ

我戀はよどみに浮ぶうたかたの且つ消えてゆく刹那々々に

思ふ君と夏野を行きぬ薔薇色の草に入る日を美しと見て



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 七夕の夜

物集和子

お蔦(つた)は札の辻の友達の家へ遊びに行つて、彼の方はもうお子さんが二人あるの、大變に老けて見えるの、お内儀さん染みて、意氣な丸髷に前掛なんぞ掛けて被入るの、此度彌々例の光子さんもお極りなすつたんですつて。子爵とかで、學校の校友會の此の春の時には、馬車でお乘り込みなすつたとか云ふ、大分は友達の噂で持ち切つて、サイダや葛餅を食べて歸りには、夕日が強く薄紫の日傘で遮へ切つても、傾けた襟の邊りは何となく暑かつた。

お天氣の續いた町は、砂埃に煽られて、後毛を搔き上げる度びにザラ〱と氣味惡く思はれる。水を撒いてる家が多かつた。而してお了ひには、

「貴女は何が不足で然うやつて被入るかと思つてよ、隨分佳いお家からお望みだと云ふぢやありませんか、私なんか考へたら申分か無いやうに思ふんだけれど、」と何日か一遍それ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を云はふと思つて居た事を、漸つと云つて了つたと云ふ風で、和目な女は夫れ丈云ふと默つて了つた。お蔦は乾度、何日かは此の女の口から、斯う云ふ言葉を聞かされるだらふと豫期してゐた事に、今急にバッタリと出逢したやうな氣がして、一寸返事に詰つたが、品の佳い若奥樣らしい、大きな丸髷と紅いてがらとに目をやり乍ら、

「何故でせう、」とつけもないやうに、其の癖其の返辭とも聞かれるやうな言葉を故意とはぐらかすやうな調子で云つた。

「だつて慾を云つたら際限が無いでせう。」と其の女は眞面目に云つた。其樣に慾張りに思はれてゐるのかしら、と可笑しくも思ふし、口惜しくも考へた。其樣事を胸の內で繰り返し乍ら、何の氣なしに、出て來た友達の家をもう一度振り向いて見た。

　此の頃のお蔦の心にある考へが、丁度其の女の口から聞いた事で、一層煽り立てられるやうに思つた事があつた。それは女優になつた同級の女の噂で、お蔦は一々其の樣子を想像してみた。華派な友禪のやうな縮緬の單衣、鼈下地、名を染め拔いた手拭、假りにも自分達が思はなかつた、眉迄落してゐると云ふ。而して其の女は自分の職業を何より樂しいもので、其上に氣樂だと云つた、其の女の口から俳優をさん付けにすると云ふ事さへお蔦には耳新らしく聞えた。もう一生お嫁になんぞ嫁かないのよ。又行く氣も出ないわ。朝から晩迄一人の人の機嫌許りは取つて居られやしないんですもの。と云ふ言葉や、華派な藝



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人生活の有様を、歴々と思ひ浮べて、自分の胸も、何だか一緒に亂れて行くやうに思はれた。それに競べて、自分はまあ何と云ふ暮し方をして居るんだらふ、母とても、姉とても、自分の心を不知ずに、只人より云つて來る縁談を受け次いで、好いの惡いのと取沙汰をして居るのが、聞くさへ辛く思はれてならない。母に奈何して自分の心が分つて堪るものか、と云ふやうな考へが始終胸に湧く。お蔦とは三十も違ふ母には、年が十五も違ふ事や、再婚と云ふ事は何とも思はれなかつた。學生時代の放蕩も、先妻の藝妓だつた事も、家の名譽と、結婚と云ふ美しい字に包んで了つて、今更ら新らしいやうな貌をして、寫眞迄寄越して、母を迷はせる男の心が憎らしかつた。自分は好いとも惡いとも云はず、母が何の位迄仲人口に乘るかを見て居たいやうな氣もした。母の心は、二つ違ひの去年卒業した妹の養子を迎へる爲めとは、云はずとも分る。

お蔦は俯向き勝に、人の軒を歩いて居たが、軈て山内へ來て電車にのつた。車が日比谷を通る時、何々會御連中と正面に淨山貼り出してある劇場の横手に、幾臺か乘り捨てゝあつた馬車や車の內で、其の女が乘ると云ふ、草色に塗つた車が殊にお蔦の注意を集めた。彼の建物の中で、曾て自分が遊んだ一人が、其の人とは思はれないやうな變り方で、花形として薄紫に紅に、裝を凝らして、幾多の人の賞讃を買ひ、幾多の若い女の嫉みの的となつて居るかと思ふと、的もない幽かな嫉ましい氣に驅けられた。自分の目の前の、會社



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

員らしい若い人が、得意らしく夕刊を買つて相場欄を見て居たが、懸てポケットから蟇口を出したり入れたりした揚句、皺だらけの紙幣を延し乍ら渡して、回數券を買つたのが、其のカラーやカフスの汚れと一緒に、平常より一層貧乏臭くお蔦の目に映つた。

駿河臺下で降車て、紅梅町の家へ歸ると、丁度行水が濟んだ許しの妹は、珍らしく島田に結つて、藤色のやうな絞りの浴衣て、昨日買つて來たきり〳〵すに新らしい胡瓜を入れてやつて居た。伊豫簾も捲き上げて、冷たい風は思ひの儘坐敷を行き拔けて、其の傍に釣るした岐阜提灯の水色に秋草を描いたのを亂してゐた。

「母さまは。」

「今御飯よ。」

と低い小さい聲で妹は云ふ。妹と並んで虫が今にも鳴くかと立つて居ると、今日は白粉も塗けたらしく、仄かに其の匂ひがした。お蔦は故意と傍を向くやうにする妹の貌を、意地惡く凝乎と見詰めた。

「島田が好く出來てねえ。」

「變てせう、見つともないと思つたけれど、母さんが結へ〳〵と仰在るから。」

「結構ぢやありませんか、束髪より餘程いゝわ、それに若く見えるし、せい〳〵十七位よ。」と染々云つた。細面に中高な貌が、這麼髮には好く映つて、今夜許しは妹が奇麗に見



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

えた。

お蔦は自分の汗ばんだのも忘れて、柱に倚りかかつて、手持無沙汰に、水を遣つたコップを持つた儘俯向いてる妹を、しげ〳〵髪から爪先迄見てゐた。好くお蔦が白粉を塗けてゞもゐると、三つ違の姉のおゑんが、何とも云はずに凝然と見て居る事が度々あつたが、それを何の事とも氣が付かずに居た。殊にいさかいでもした後は猶更らみた。只さへ大きい目を睜つて、掌てあごを支へて、笑貌一つせず、心の内の思ひと云ふ思ひを、皆んな目へ移して了つたやうな、鋭い見方をされると、蛇度彼の娘は白粉を彼麽風に塗ける、彼麽紅のさし方をする、と思はれやしまいかと可厭だつた。それでも見て居乍ら、時には、「綺麗になつた事、」と打捨るやうな云ひ方をして、自分も貌を洗ひに行く事などもある。それが今妹の貌を故無く染々見る役になつたかと、妙に心淋しかつた。それでも自分が決つして醜くなつたのではない。妹がそろ〳〵人の目に立つやうな年になつたのだらふとは考へるけれど、妹を見る目に險しい光りがなければいゝがと、自分乍ら危ぶまれた。

「あつ姉さんから御手紙が來てゝよ。」と妹はいゝ事を思ひ出したやうに立つて行つた。まだ其の後付きには何の嬌態もなかつた。妹に手渡たされた姉の手紙を見ない内から、今日友達の家へなんぞ行かずに、姉の方へ行けば好かつたと直ぐに後悔した。すると成る可く侮暗くした六疊に寐てゐる姉の蒼白い貌と、大儀そうな體を思ふにつけ、父もなく母もなく



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

親身と云へば只一人の姉と云ふ事さへ、今日は妙に胸をふさがれるやうな心がする。初め姉さんに子供が出來たと聞いた時、今迄は白蓮のやうに美しいもの、氣高いものと思つてゐた姉さんが、急に地に落ちて了つたやうに思はれて、自分が泣いても追付かないやうな、手の内の玉を兄さんからもぎとられたやうで、兄さんが如何にも殘酷なやうに思はれてならなかつた。薄い光りの元で、薄墨で書いた手紙を讀み終ると、其の儘懷中に入れて、何を見るともなく凝乎としてゐた。提灯の紅い房が二つ三つくる／＼と廻つた。

「姉さん行水は、」

「まだ。」

「そう、今あいてるわ。」

「まア後でもよくつてよ、それよりか染ちやん之でも食べようよ。」と袂の重みで思ひ出した、借りて來た紅い鹽瀨に、壽と絞りで白く染め拔いた手帛沙をほどくと、ツップルと桃山を包んだ紙をあけた。

先刻迄はまだ薄明く思はれたのが、もう何處にも明るい影は見出せなくなつて、直ぐ目の前の植込みも、一々吉野紙を通した朧ろげな灯でなければ見えない程になつた。提灯の廻る度びに、思ひ出したやうに枯竹草の紅いのが、二三本明瞭と現はれる。而して其暑苦しいやうな、其の瓣幽かな匂ひが折々した。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

裏の方ではもう新内を流して來たのが、話をしながら時々申譯のやうに、高音を引いたり、一を打つたりして、その下駄音迄聞えて來る。お蔦には、何だか此の新内の流しが、妙に心の底に沁染み渡るやうに思はれる。段々と遠く、目に見えない糸でも引いてゆくやうに、幽かに〳〵はては消えるともなく、何日の間にか消えて了ふこの音を聞く度びに、遣る瀬ないやうな思ひに惱まされた。見もしらぬ、思ひもしらぬ、遠い人の世が戀しいやうな、氣に迫まられる事が度々あつた。そう云ふ時にはよく德兵衞の上を思つた。德兵衞とは何日か見た宮戸座の曾根崎心中の中の人であつた。去年の十月、友達と二人でお揃ひの下駄を買ひに、雨の降るのに淺草迄行つた。平常の人込みに引更へて、雨のふる日は、仲見世から觀音さまへかけて、眞の用のある人しか通らない程だつた。二人は云ひ合したやうに觀音さまの方へ行つた。雨で殊に羽色が艶々しくなつた鳩が、誰も豆を撒きてがないので、お堂に上つたり、雨のかゝらない處に塊つて居たのが、お蔦が豆を投ると一時にパッと寄つて、重なるやうにお蔦のぐるりを圍んだのが、今でも目に殘つた。

「昨日は九月のお節句だつたのね。」

「そう、奈何して。」

「だつて這麼に澤山豆菊が上つてゐますもの、之を持つて來ては此處に上つて居るのと取り替へて行くんでせう。」と友達は敎へた。お線香の絶え〳〵になつてゐる傍には、萎れか



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゝつた豆菊が何本となく上つてゐた。道に捨てゝあるのもあつた。氣紛れに芝居の看板を見て、二人は入る氣になつた。入るとすぐにもう此度は二番目ですと敎へられて、行き慣れない芝居に、妙にせか〳〵と落ち着かない心持で、絶えず見てゐた。華やかな舞臺に、元祿の若衆姿の德兵衛と、その頃の遊女風のお初との戀は、美しい色彩にいろどられて、お蔦は只お初德兵衛の爲めに泣いた。出てからも舞臺の事ばかり考へられて、氣の拔けた人のやうになつて、雨のぬかるむ道を宅へと急いだ。

それから見た忠兵衛より、治兵衛より一番初じめに見た德兵衛に心を動かされた。お蔦の心は華美な元祿姿の德兵衛の上によく行つた。自分もお初のやうに扮つて出て見たい——と思はないでもなかつた。それを思ふと夢のやうな美しい幻が浮かぶ。自分の行先が急に明るく、廣くズッと前に擴げたやうに思はれた。種々の事を考へ乍ら妹と一緒に食べたワッフルには、何の味もなく、只口を動かしてゐると云ふより外には何でもなかつた。

不意にキリ〳〵と頭の上の蟲籠でないた。

「あら鳴いた、」と二人一時に云つて目を見合すとほゝ笑んだ。

仲見世のどら燒が食べたい、と、この前行つた時に姉さんが云つたのを思ひ出して、お蔦は淺草迄行つた。それを買ふと、又兩側の涼しそうな品を並べた簪屋や、書双紙やの前で



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は少し宛足を悠るめて歩いた。向ふから、細かい破れ格子の浴衣に、狹い白博多の帶をわざと小さく貝の口に結んだ、姿のいゝ此處等の藝妓が、下駄と傘とを贅澤なのにして、七つ許りの子の手を引いて、

「お人形さんが好いの、」と云ひ乍ら店の方へ行つた。

丹塗りの藥師堂の傍には、人が多勢立つてゐて、其の間から途斷れ〳〵に尺八の追分が聞えてゐた。大分何日も居る老人の盲目だらふと見ないで過ぎて、今は何をしてゐるだらふと又看板を見た。此糸蘭蝶とあつたので、又妹を誘つて、女中と三人で來よう、其の方が母も快く出して呉れるから。

谷中の姉さんの家へ着いた頃は、暑い日もやゝ蔭が出來てゐた頃だつた。電車に乘つて近道を取つて來たものゝ、大きな包を持つては可成難儀に思はれた。洗つたやうな格子戸を啓けて、穿物一つない三和土の内に立つて聲を懸けやうと思つたが、森として丸で人氣もないやうに思はれるので、其儘案内も待たずに、ズン〳〵姉の寢てゐる部屋に入つた。

「姉さんお休み、」と聲を懸けて、襖をソッと開けると、ペタリと姉の傍に寄つて座つた。枕元を少し離れて、屛風で暗くしてあるへやに、おえんは麻の掛布團の上に片手を出して、スヤ〳〵寢入つて居たが、目覺とく、パチッとその黒目勝な目を開けると、莞爾した。洗髮を一寸束ねた儘の髮は、ピンと一緒に悠く解けて、括り枕から疊へ迄流れてゐた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「好く來たわね、手紙が屆いて、」
「え丶昨日、だから來たのよ、淋しいでせう。」
「あ丶。」と頷くと心細そうな目をして、一寸手で泪を拭いた。何彼につけて神經の昂ぶつてゐる姉は、誰かしら傍に居なければ寂しいのと、種々不快な事を思ひ廻すので堪らないと書いて寄越した。直ぐ目の前に被さるやうな枝を延した百日紅は、その毒々しい迄に紅い花を、照り返す夕日に晒して、血を見るやうに思はせた。
「暑苦しい花ね、色を見てもうんざりして了ふ。」と姉さんは首を振り乍ら云ふ。次の間との北の境は、レースが掛けてあつて、それから絶えず冷たい風が流れ込むでゐた。
「兄さんは、」
「まだ歸らないの。」
「ぢやァ餘計淋しいわね。」と云ふと何となく可笑しくなつて笑つた。隣りがお寺になつてゐて、一人の女中が晝寢でもしてゐるのか、物の音一つしなかつた。兄さんが好きで庭も半分は畑のやうになつてゐて、丈の高い唐黍や胡瓜や藤豆や、外に西洋の豆らしい紅い花も蔓に咲いて居た。
「どら燒を買つて來てよ、それから之も。」
お蔦は途中で目に止つた、藍色の地に荒い格子が黑で出てゐる浴衣を出した。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私が縫ふから着て見て頂だい、屹度好く似合つてよ。」
「意氣だことねえ。私には似合ふかしら、」
「普通よ、姉さんは意氣が好きぢやありませんか。」
容貌自慢の姉は透き通るやうな歯をみせた。それでも平常程奇麗には見えなかつた。眉と目との間が奈何も何日ものやうに鮮かとは思はれない、暗い影がかゝつてゐるやうに思はれる。
「今夜は泊つてもいゝの、」
えゝ二三日はいゝのよ、だから御馳走をしませうね、何でも食べたいと思つて被入るものをこしらへてよ。」

夕ごはん後は盆燈籠に火を入れて、兄さんと二人は姉さんの枕元に座つた。兄さんは蚊遣りの烟がよく出ないのを氣にしてゐた。
「蔦ちやん、此度私が死ぬかもしれないから宅ぢや盆燈籠を今から點けてるのさ、早いでせう。」と笑談らしく厭味を云つた。
「厭な、ても奇麗でいゝぢやありませんか。」
「だから兄さんは好きなのさ、私が厭だつてのに奇麗だつちや點けてるの、」澤山おつけな



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さいと云つた風に兄を見て云つた。不意と今迄些少も氣が付かなかつた、紅入り友禪だの、紅なしだの丶メリンスの一つ身が、生モスの裏がついて、四五枚姉さんの裾の邊に重ねてあつた。レースのついた涎掛けさへ置いてある。お蔦は生れる子は兄さんに似ても、姉さんに似ても、器量好しだと思つた。兄さんは姉さんの藥壜の下になつた紙切れをとると、お蔦の前に出して、

「蔦ちやん、子供の名を先日二人して考へたんですがね、此の中で何れがい丶でせう。」

紙には、謙一、道之助、時雄、富美、鈴、雅子と書いてあつた。

「雅子がい丶わ。」

「然うですか、僕は男なら道之助、女なら富美子と極めてるんだがなァ。」

「道之助は可厭よ、安つぽくつて、謙一の方が好いわ。」と姉さんが横から出て、

「ねえ。もし男の子だつたら何を買つて被下るの、ダイヤの指輪？ダイヤでも安過ぎるわ。」

「そうさね、ルビー位にして置くさ。」

「おや然う？ならもう澤山、頂戴しませんよ、馬鹿〳〵しい、あの女の時は何を買つて、鳥渡、ダイヤぢやなかつたわね。」と眞氣になつて姉さんは笑つてる兄さんの顔を睨むやうにして云つた。其の目にはもう泪が溜つてゐる。此樣詰らない事にでも、一々嫉んだり、



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妬んだりして、兄さんの四五年前にした道樂を云つちや、今初じまつたやうに泣いてゐる姉さんを如何にも詰らなく思はれて仕方が無い。

「僕は一寸其處等を散歩して來よう、何かいゝものがあつたらお土産を持つて來ますよ。」と兄さんは莨を啣へたなりで、帶を卷き返し乍ら出て行つた。

　野分みたいな風の吹き方で、可成廣い庭を風が自由に往來した。どんより曇つた空は、雲が蔽ひ被さるように低く、草でも木でも靡き倒してもするやうな強い風が、高い木の上を渡る時は恐ろしいやうに思はれた。椽側に出てみると眞暗で、一間先も光の屆かない處は只暗かつた。燈籠の火が屢々消えた。

「其樣處に立つて居ないで此方へお入りよ。」とお篤を坐らせると、まじ〳〵薄笑ひしながら、

「あの方は奈何して、斷つたの、」

「否。あのまんま、」と堅くなつた。

「ぢやァ斷りも奈何もしない、母さんには奈何しても思ひ切れないのかしら、餘程此度のには御執心とみえるわね、だけど止した方が好くつてよ、良人の話ぢやね、學生の時分にある女と關係して、その女が何かの事で剃刀で死ん了つたんだつて、それを聞いてから可厭になつ了つたわ。之はだめだと思つてね、でも一寸聞きがいゝから誰でも迷はされてよ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だけど之は止した方がよくつてよ、而してもつと外のいゝ處にするといゝわ、私が目つけて上げてよ。」と無雜作に、其の姉妹の爲めを思ふやうな口吻で云ふ。

「其樣事は奈何だつていゝのよ、私にはまだ何とも仰在らないし、仰在つた處で大丈夫よ。」其樣事で迷はされやしません、と云つて了ひたいやうな、力强いやうな云い方をした。姉さんも初じめは贊成して置き乍らと少しは可笑しくもある。

「良人でも心配してるのよ。實はね友達で貴女を是非つて人があるの、知つてるでせう。何日かお月見の晩に來た人、枝豆が莫迦に好きだつて貴女大變に笑つた、あの人よ、奈何？私達はいゝと思ふのよ。」

「そう、」

「まア冷淡ね。」

「えゝ。」

「何故？」と聞き返した時は、もう少し氣色を損じてゐるのが見えた。

「私、」とお蔦は云ひ淀んだが、思ひ切つて、

「女優にならふかと思ふのよ。」と早口に云つて了つて、譯もなく顏を紅くした。

「まア蔦ちやんが――」と呆れたやうな目をした姉の口許には、ありくと冷笑の影が見えた。其顏で女優、ときゝ返して遣りたい程に、妹の心が生意氣に思はれる。何故無言つ



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て自分の云ふなりにならないんだらう。自分は妹の爲め許し思つて遣つてゐるのに。「結構ね。」と云つた許りで、心の不愉快さは蔭そうとしても、顔にも態度にもつひ顯はれた。

「私もう遠から決心してたの、只何日お話しようかとそれ許り考へてたのよ。」と妹は目眩しい物でも避けるやうに、姉の目から顔を避け乍ら賴むやうに云つた。

「ぢやア遠からなの、」

「えゝ。」

「そんなら何故もつと早く云はなかつたの、其樣事は知らないから私しや貴女の爲許し思つて、良人にも賴んだし、良人から他家にも貴女の事を賴みまはったり、極が惡いわね、今更ら止すとも云へまいぢやありませんか。」と口をついて出た。

「えゝ全くそれは濟まなかつたのよ、申上げやうと思つてゝも遂い云ふ機がなかつたもんですから、ねえ、姉さんさへ贊成して下されば私誰が何と云つてもいゝわ、奈何でせう。」と縋るやうに云つた。德兵衞の樣子を思ひ浮べて、何だか樂しいやうな氣がした。姉には見せたくないもので、又見たとて決つして面白いものではないと思つた。

「貴女は彼の女のやうになりたいの、」と姉は少なからず侮蔑の口調で云つた。其の癖、もし妹の名が高くなつたら甚麼だらふとも考へてみた、何故か妹に其樣名を上げて貰ひたく



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない、矢張り私と同じやうに家を持つべきだと思つた時、其樣子は奈何にも取り付き端のない程冷たいものだつた。

「私としては決つして贊成をする事は出來ないわ、又良人でもそれは大反對よ、もう一度考へ直したら、——」

「えゝ、」と素直に首肯いたが、姉さんにはもう話すまい、醫へ云つても、おゑんの心と自分の心とには遠い隔りが出來てゐる、姉には良人や家の方が、自分より遙かに貴いものになつてゐるのだから。只その前に一度云つて置けば、姉へ對しての義理は濟んだやうなものだと諦らめた。

「貴女が其樣事を思ひ立つても、私は決つして止めやしないけれども、何しろもつとよく考へてね、之が他人でもなら面白い事だと云つて贊成もするけれど、妹が俳優になると云ふと一寸いゝ氣持はしないはね、奈何しても止めたくなるよ、それが又思ひ通りにそうスラ〳〵行くものか奈何かも考へなければね。」と何處迄も思ひ切らせないでは置かないと云ふ調子で云つた。

「誰でも自分の思つた事の半分も行かないものよ。私だつてどんなにかいゝ心算で此家へ來たか分りやしない。」ともう笑ひ乍ら、何日の間にか自分の方に話を引張つて、

「來る時は大した考へて來たものよ。」



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「でもそう〳〵は行かないものね、でも貴女はまだ體が極つてゐないし、好き自由で、未來は長し何うにでもなれるわ。私はもう奈何しようにも今更らならないでせう。だからせめて未來のいい話でも聞かなくつちや、時々良人に未來の話をして呉れつて頼むのさ。」

「そんな時には兄さんは何と御在つて。」

「女なんぞに云つたつて分りやしないつて、云やしないわ、だからもう聞かないの。考へるとね、何の爲めに斯うやつてゐるかと思つてよ。之から未來だつて奈何成行くものか、考へたくもないわ。今丈で澤山なやうな氣がしてよ。」

蒼白い貌は、疲れが出たらしく薄紅くなつて、捨鉢に云つた口許には、失望の色が讀まれる。お蔦は何と云つて慰めていゝか、その言葉に困つた。此の儘姉さんと一緒に、大きな聲を出して泣きたい、泣いたら姉さんの失望の幾分かゞ洗はれて了ふかと思はれるから。

「蔦ちやんはいゝわ、」とつく〴〵自由な妹を羨むやうな口吻をした。

「だつて姉さんは奇麗だから羨やましいわ。」

つひ日頃の思が口に出た。おゑんは只笑つて居たが、それでも嬉しさは隱されなかつた。姉さんの慰めは姉さんの貌だらふ。着物が特別好きなのも、髮の結び方の難しいのも、皆んな姉さんの美貌がさせるんだらふと思つた。風の間〳〵に、畑の方でガチャ〳〵が喧しく鳴き立てるのが耳につく。誰が離したんだらふ。

「おゑん、奇麗だらふ、蔦ちやんみて下さい。」

散歩から歸つた兄さんが、ギヤマンに入れた金魚を姉さんの目の前にさしつけるやうにして見せた。眞紅なのや、白い斑の入つたのが、青い藻に絡んで、大きく光つて見えた。

翌る日は昨夜の風にも似ず、雨もふらずによく照つた。その代り砂は一日緣に舞ひ上つて、氣持惡く思はせた。姉さんは今日は少し氣分が好いと云つて、夕方行水を使ふと起きてみた。而して椽側で爪を切つてゐるお蔦に、

「夜る爪を切ると親の死に目に逢はないとさ、およしなさいよ、」と笑つてとめた。姉さんが妙な事を云ふと思つて返事もせずにゐると、おゑんはそれには一向頓着せず、

「昨夜は七夕さまだつたつてね、今日は明瞭と見えるよ天の川が、來てごらん。」と坐つて柱に倚りかゝつて上を見上げた。お蔦も立つて柱に掴まつて上を見た。撒き散らしたやうに、蒼く澄み切つた空一面に、小さく輝いてゐる紅や青の星の間に、それかと思ふ銀河が、白くづうつと西の方迄續いて空を橫切つて居た。——完——



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# ヘッダ、ガブラー論

メレジコウスキー

イブセンの劇の内で他の特色あるものとして、ヘッダ、ガブラーはゴースツに於て見る樣な廣い歷史的な又社會的な基礎はもつて居ないけれども、近代人の內的葛藤を描く事に就て、作者は未だ嘗てこれ程の程度に達したことはなかつた、劇全體はヘッダ、ガブラーなる中心人物に集まつて居る。同時代の道德的生活のあらゆる方面を含むこの廣さ、哲學的概括は、同時に一個の個人的性格を有つて居る。劇中の他の人物は皆中心人物を際立たせる爲に寄り集まつて居る。是こそ眞の戲曲的肖像である。

女主人公の像は作者自身によく分つて居た。即ち彼は自分の心を惹いた女のやうに、又其女の爲には慘ましい苦痛にも堪へたやうに彼女を美しく、注意して描いて居る。其顏の極々少さな皺でも、着物の鳥渡した襞までも明断と彼は見屆けた。序幕の註に書いてある彼女の容貌は斯うである。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「年齡二十九歲、氣高い、貴族的な處のある容貌、風采。餘り白からぬ皮膚。冷靜な、透明な無感覺な情をよく表して居る鋼鐵のやうな灰色の眼、餘り濃くはないが、綺麗な栗色の髮の毛。」

激した瞬間でさへ自若として居る此冷靜な透明な無感覺はヘッダの人品に貴族的な魅力を賦與して居る。

大學の文明史の講師である夫、ヨルゲン、テスマンは中流社會の凡庸の權化て、其取るに足らぬ、平凡な粗俗と無能力とは妻が何の理由もなく只無意識に、不可抗的に、其天性の全力を擧げて輕蔑する處で有つた。

それなら何故彼女は彼と結婚なんかしたのであらう?

先づ第一の理由としては、彼は他の誰れよりも堅實で、そしてまだしもの人のやうに思はれたからである。それと又困憊と、冷淡と、靜かな意識的の絕望とからでは有るが、恐らく又、學者振つた仕方で自分を大事にして與れるこの尊敬す可き好人物と一緒に暮すことは他の誰れと伴にするよりも詰りは自由に相違あるまいと云ふやうなう多少の希望も有つたのであらう。

彼は幸福と云ふ事に就ては極めて有振れた考へを持つて居る極家庭的な夫である。彼は理想の豐富からでなく寧ろ智力の缺乏に基する非實際的の人間の常として、お目出度い、予



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盾だらけな意見を有つて居る。彼の言語、動作は悉くヘッダの氣を損うた。彼は稀に醉ひもしたけれどまづ大抵は不利な、面白からぬ位置に置かれて居る。彼は途切れ、途切れでなければ、混亂して、甚く吃驚した風に「マア」とか「ナンテ」とか入れなければ只の一句も云はれない。此樣な男で有りながら物質上の利益問題、報酬の好い大學敎授の公職に關する問題に對した時、彼は狡猾になり、拔目なくなり、邪惡になつて、決して一見して想像したやうな愚物でもなければ又望みのないものでない。併してテスマンとても敎授の職を只黄金の源とばかりも見て居ない。彼は書物其物の爲めに等しく書物を愛する、記錄所の香を吸ふのを喜ぶ、そして新に購入したる書物の頁を切る事にさへ肉的快感を誘ひ出す。序幕に於て、彼は優しい心遣ひと熱心とを以て、眞劍にヘッダに見せたのは伯母さんが彼の本宅から持つて來て呉れた、二人の新婚旅行中、家に殘してあつた間に失くしたと思つた、彼に取つては大事な古上靴であつた。自分はやがて父親になるかも知れないと云ふ單純な考へが彼の內心に抑へきれぬ喜悅と、愚にも亦高慢な自足心とを起した。彼は耐へ切れないで逢ふ人毎に、下女をも問はず其喜悅を知らせたく思ふ。テスマンはヘッダが絕對に自分に反對して居る事を確に認めるに足る丈けの眼を有つて居ない。

　結婚前、ヘッダは其父、ガブラー將軍の家でゲルレルト、レエボルグと云ふテスマンの未來の競爭者（彼も亦文明史の講座の候補者である）なる一靑年學生に會つた。レエボルグ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はヘッダを愛したそして彼女は彼を失望させた。其理由は思ふに彼女が彼に對して冷淡でなかつたからであらう。彼女は彼が有つて居たる偉大な精神力と才能とを知つて居た。此レエボルグと彼のお目出度い、物臭なテスマンとは實に申分のない好對照である。彼は彼自身たる可き力を有つて居る、彼は書物は愛さないけれども人生の知識を愛する、彼は獨創的で大膽でヘッダの如く自由と否定には至極の境地にまで突進する。彼は中流社會の公然たる敵で社會からも亦無賴漢のやうに見做される。

しかもなほヘッダは彼を愛する事が出來ない。レエボルグの性格の或特性がヘッダの美に對する生來の爭はれぬ本能を傷ける。

何等の出口を見出せない才能の力がゴースツに於けるオスワルドの如く、又レエボルグの中にも、同じ種類の不德と疾病とを發展させるので、それは時として知識の低い人達が彼に對して懐く憎惡の念に正當の理由を與へる。

彼には少しの平靜もなければ、自制もない。彼は憎惡と破滅とを或は容れることも出來やう、併しあらゆるものに對する冷淡と、過度の困憊とが彼を絶望に逐つた。彼は酒色に忘却を求める。彼は惡戯をして市のあらゆる有德な凡俗共を態と脅かして見て、後では自ら心に慚ぢた。此病的敏感の激發が彼からヘッダを引離した。是等のことがヘッダには不自然とも醜惡とも見えるので、もう此樣な醜いことは死よりも恐れて居る。或は又彼と結婚する



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣になれなかつたのは彼女の中に犯罪的分子が餘りに多く、性質が餘りに熱情的であり、其馬鹿々々しさと、滅茶苦茶さ加減がレェボルダと餘りに多く似通ひ過ぎて居たからでもあらう、彼女は粗慢な醜惡な、そして不格好な力に對抗するに十分な力を有つて居ることを知らない。だから彼女は自分が愛することの出來た唯一人のレェボルグを棄て、輕蔑はしては居るが、併し自分の自由になる見掛け倒しの價値なきテスマンに生涯を委ねて、彼女の滅亡の原因である此愛の虐殺を犯したのである。斯樣に其行動は自尊心(プライド)から出て居る。ヘッダ自分をも憫れまない。ヘッダは人の賤(いや)しい天性を許す事も出來なければ許さうとも思はない。控目な、併し愛に强い、其の氣高い情(こゝろ)は、信仰を失つた時、それ自(み)らを燒き盡して、人生に對する反抗と憎惡とに轉じ、其最後の情熱は達し難き美に對する仇なる愛となる。此愛には幸と云ふものが絕えてない。邪な、疲れ果た、そして望のない情熱――死病のやうなものである。ヘッダは美を愛した、――しかも地上に於ける其存在の可能を信じて居ない。

併し總てこれは私共がほんの偶然の論及から知つたのでヘッダは彼女自身の內的世界に就ては全く語らない。彼女は人に對する輕蔑の念や、人を嘲笑し、人を損傷せむとする欲求などを自分自身にさへ隱す。

他人の苦痛が快感を與へる程其心は硬く、そして拗けて居たが、最後まで彼女は決して自制力を失はない。取るに足らぬ、むさ苦しいものゝ只中に、或は敗滅の境にあつて他に何



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

物の美も見出されない時でも彼女は獨り美しく殘つて居る、よし此荒凉な、慘ましい美からは死の冷たさが發散するとも。
彼女が有つて居る精神的貴族の最高品位即ち純朴と、中庸とは結び付いて全性質に遠ざけ難き魔力を與へて居る。
滅亡の境からレエボルグを救つた善良なそしておとなしい細君はテーア、エルブステッドで、テーアは此不幸な人に取つては守護の天使で、同時に又同輩でもあり、介抱人でもある。彼女は忍耐と温順と母親のやうな心遣ひとを以て彼を勞り、放蕩を疾病だと思つて其無法な、無節制に打克つた。今一歩必要である、今一骨折る必要がある、と、そして遂にレエボルグは悉皆救はれたのであらう。彼は書物を出版し、思想界に於て大好評を受ける文明史の講座はテスマンでなくて彼に占められるであらうと云ふやうな風聞さへ傳はる。名聲は彼を待つて居る。テスマンに取つては此昔の學校友達で、そして競爭者である彼の不意の成功を聞くことはヘッダが云つた通り落雷だ。
劇が開ける時、丁度レエボルグは新刊の文明史第二卷で今度又出版しやうとして居る原稿を携へて田舍から出て來た。此書物は彼の書いたものゝ中でも一番好いもので、敵に對する勝利と、偉大な名譽とを彼に齎すものなのである。併しテーアは此病人が健康を全く回復したとは信じてゐない。彼女は心配の餘り、彼を監督し、いざと云ふ場合には誘惑か



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら救ひ出さうとひそかに市に出て來た。そして其在所を探し廻つたが、偶然にも自分の學校友達のヘッダの家で彼に落合つた。

さてテーアがレエボルグを感化した事に就てヘッダに語つたところは斯うである。

「あの方は悪習先の習慣は棄てゝ仕舞ひましたの。それは私が斯うとあの方に強て迫つた故ではありません。さう云ふ事は私には決して出來ませんの。只あゝ云ふ慣習を私が嫌ふのに氣が付いてあの方が棄てたのに相違ありません。」

ヘッダ(微かな嘲笑を隱して。)「それでは貴女だつたのね、噂の通り。正しい道にあの方を連れ出したのは、ね、テーアさん!」

氣弱なテーアはヘッダより大な力を顯はした。彼の强情の前にも畏縮せず、只單純に溫順に其使命を果し、そしてヘッダには出來ない仕方て愛の衝動に身を任せた。ヘッダはレエボルグを妬みもしなければ今は戀しいとさへ思つて居ない。只彼女の心を亂したのはテーアよりも自分が弱いと云ふ考へであつた。自分の滅亡に悶えて居るヘッダは他人の光榮には堪へられない。今が今迄長い間抑へに抑へて居た人生に對する反抗心と人類に對する憎悪の念とは破壞性の抵抗すべからざる本能に身を代へた。どんな障碍物もたとへ神聖なものであらうともう今は止めることが出來ない。彼女は何ものにも憧憬しない、何等の欲求も有たない、彼女は罪悪を私心なく犯し、自分を全然忘れて大苦痛につき、他人の破滅を目擊



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

する事に依つて得られる快感の爲に、惡の爲の惡をする。彼女の美は云ひやうもなく恐ろしくなり、しかもなほ增して時に恐ろしい破壞的元素の美のやうに見える。ヘッダは其美と虛僞とによつて自分に近附く者共を皆網にでも入れたやうにくる／＼と絡むのである。

無理押付けではあつたが彼女は柔順なテーアの信用を得る。テーアの自白を卷上げる。テーアの方ではヘッダが恐ろしい、どうかされやしないかと心もしどろもどろになつて、キッスされた時は蒼くなる。それでもヘッダの美はひたと面しては恐怖と嘆賞の械にかゝつてその意志と魔力に杭する力はない。ヘッダは自分の生贄に對し切なる温情を有つてゐると云ふことを話した時は全く噓を云つてゐるのではなかつた。そして彼女を愛撫しながらヘッダは其破滅を計畫する。病氣の子供でも扱ふやうに彼女を扱ひ、「あんた」と言はしたり、其柔いブロンドの髮毛を撫でたりしながら、とは云へ彼女は相手の耳に罪な言葉、即ちテーアの破滅となり又レエボルグの破滅となるやうに豫定されて居る誘惑的なそして逆意的な忠告を囁く。そこでテーアはヘッダの掌中の柔順な武器となつて彼女を尊敬する。彼女の恐怖の大なるに從つて、其服従の度も一層增してゆく。

思ふ壺にテーアを入れたヘッダは今度レエボルグに取りかゝる。彼女はまづ彼に昔を思出させて、今の新しき友達との仲を訊ねる。彼は彼女即ヘッダに關しては少しも變らないと云ふこと、彼女と、——同じやうに苦しんで居ると云ふこと、彼女を——只彼女をのみ愛



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すると云ふことを白状する。そこでヘッダはいよ〳〵大膽に振舞ふ。

レエボルグ自身とても正しい道に自分がすつかり立ち返つたものとは信じて居ない。テスマンの友達でヘッダの憧憬者の一人の判事ブラックの家で、獨身連中の酒やカルタの會がある。連中はレエボルグを招待して仲間入りさせやうとする。彼は自分を信頼することが出來ないのでそれを斷はる。たつた一つの酒杯が、自制力の總てを奪ひ、誘惑に抵抗することが全く出來なくなるに十分だと云ふことを彼は知つて居るので、一度飮み初めると二度は決して止められない。ヘッダはテーアの眼前で、彼を愚弄し、其自尊心を刺戟し、誘惑的に微笑を堪へてポンチの杯を手渡しする。彼は滓までもとそれを飮み干す。

テーアは彼を止めやうと力める、してこれこそもう明らかに彼女の破滅を證明するものである。忽然として彼は自分の守護者に反抗した。自分の弱さと不如意さを知ることは彼にとつて苦痛だ。彼はテーアに關はず二杯目を飮む。そして三杯目！テーアは彼の爲に死ぬばかり苦悶して、ヘッダに訴へる、ヘッダは只嘲笑して、さげすむやうな微笑を浮べながら彼女をいたはる。惡魔はエボルグの中に醒めてヘッダの挑みに應へる。酒は利目を現した。もうそれからは自分の激情を恐れない、彼はそれを征服して仕舞つたと信じて居る。或晩彼は來て、自分は變つた、誘惑に打克つたと云ふことを微笑を浮べてテーアとヘッダに斷言する。そして再び強くなり、惡習慣からも脫した上はもうどんな守護だつて不必要だ



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふ。テーアは彼が失はれたことを信じた。ヘッダは戯談らしく彼女に斯ういふ。

「貴方は勝手にお疑ひなさるがいゝわ、けれど私は受合つてよ。まあ今にわかるから……

……」テーア「貴方は何か私に隠してゐらっしやるのね、ヘッダさん。」

ヘッダ「えゝ、御察しの通りよ。私、生涯の中一度ていいから人一人の運命を自由にして見たいの。」

テーア「でも貴方はもうこれ迄になさつたのぢやないの？」

ヘッダ「いゝえ、私はそんなことは只の一度だつてしたことは有りませんわ。」

テーア「でもあの貴方の御主人は？」

ヘッダ「主人を自由にすることなんぞ大變ですわ！　ああ、貴君には少しも分らないのね、私はほんとに貧乏なのよ！　して貴方はあんなにお金持て、（テーアを烈しく抱き緊める。）

ヘッダは嘗て二人がまだ娘てあつた學校時代に見ても癪に障る程の、白い絹のやうなテーアの髪の毛を焼くと云つて嚇しては其怖がるを見て、笑ひ興じた時のことを思ひ出す。そこて今彼女はテーアを抱きながら優しく囁く。

「私、貴女の髪の毛を焼いて居るやうな氣がしてよ。」

テーアはかう叫ぶ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「離して下さい。離して下さい。私は貴方が恐ろしいの。ヘッダさん。」

併しヘッダさんは彼女を落付かして食卓の前に座らせてお馬鹿ちやんと呼ぶ。もう自分の虚僞と勝利とを隱すことさへ不必要と考へた程テーアを侮つて居るのだ。

テーアの豫覺は妄想ではなかつた。翌朝、判事ブラックとテスマンは昨夜の出來事を二人に報告する。レエボルグは自分の原稿の拔萃を聲高に讀んで盛に飮んだ。明け方になつて彼は以前關係のあつたダイアナと云ふ賤婦の許へ行つた。彼は悉皆醉つて居たので其途中ポッケットの中の原稿を落して仕舞つた。テスマンはそれを取上げて又落すかも知れないと云ふ心配から彼に返してやることを拒んだ。ダイアナの處へ行くと又恥づ可き舞臺が次いで來た。レエボルグは自分の原稿を盜まれたことに就て誰彼の差別もなく其罪をきせて當り散らした。それが仕舞には男女入り亂れての無遠慮な鬪爭となり、其眞只中に警察隊が踏込んだ。レエボルグは警官の耳を擲つて告發されたところだと。

夫と二人きりになるとヘッダはレエボルグの原稿を渡せと云ふ。鳥渡辭ひはしたが、テスマンは其要求を入れる。ヘッダは原稿を受取つて錠をかけて仕舞ふ。遂と彼女は望みを遂げて、一人の人間の運命を支配する力を自らに感じた。テーアは之に關する何事も知らない。レエボルグは登場する。彼はテーアに原稿を失くしたと話す勇氣がなくて、引裂いて仕舞つたと云ふ。熟れにせよ二人は永久に別れねばならない。氣の毒なテーアにとつてはこれ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ばレエボルグが生物を殺したやうなものだ。彼女の眞心の總ての委ねたもの即ち彼は二人の子供を虐殺したのだ。「二人の子供」と云ふ此言葉がヘッダの魂に深い打撃を與へた。

レエボルグと二人殘つてから彼女はもうテーアと彼に對する輕侮の念を隱してはをかない。「人間の運命をあの手で握るなんて、あのお目出度いお馬鹿ちやんの癖に。」と彼女のことを云ふ。力に渴へて居るヘッダが彼女を赦すことの出來ないのは此點だ。それてまたテーアの失敗を祝しもするのだ。彼女は何事も承知の上でありながら、又レエボルグに二人の子供を殺さなかつた事、いや殺すよりもまだ悪い——墮落した女達に交つて何處かでそれを失つた事に就て悉皆話させた。「あら、でも要するにそれは一冊の書物に限らないわ。」とヘッダは云ふ。

「でもテーアの純潔な魂が其本の中にはいつて居た。」とレエボルグは叫ぶ。そして再び自分に克つ事は出來さうもないと知つて、彼は自分の生涯に終局を置かうと決心した。ヘッダは彼に「紀念として」と斷つて自分のピストルを贈る。

併し此樣な瞬間でさへ美の思想は彼女を棄てない。彼女の最後の只一つの遺言はこれである。

「ケルレルド、レエボルグ、ね、聽いて頂戴。何とか、貴方、美しい仕方で仕末をつけることは出來なくて？」



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼は驚いて其間を繰返す。

「美しい。」

「えゝ、美しい。貴方の生涯の中で只一度のことですもの！　ぢやさよなら、さあ彼入い。二度とは決してお歸りなさるな。

贈物の禮を彼が云ふと、彼女は叉莊重に繰り返す。

「美しくですよ、ゲルレルト、レエボルグ、誓つてね！」

彼が出て行くと彼女はテスマンが大事にして置くやうにと彼女に預けた原稿を抽出しから取出して、爐に近い椅子に腰かけた。そして「今、私は貴女の子供を殺して居るのよ、倚麗な髮の毛のテーアさん。貴女の子供――そしてゲルレルド、レエボルグの子供。」と呟きながら、書物を一頁叉一頁と火中に投げ込む。それから後の殘りを一度に皆投げ込む。「今私は燒いて居る、貴女の子供を燒いて居る。」

此怕る可き光景は北方の或傳說を暗示して居る。私共は現實の生活から脫して仕舞ふ。ヘッダの像は擴大され、次第々々に巨大な平衡を取つて行く。蒼白い、歪んだ容貌と、烈しい淫樂の表情ある目を持て、恐しい美觀の焰を閃かすとき、彼女は稚子を殺す女神メデアか、叉スカンディナウィアの傳說による怪力、不可思議な魔術師の一人と見えたかも知れない。併し此ぞつとするやうな恐ろしい犯罪にも拘はらず――或は（疑はしいけれども。）



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

多分此恐ろしさの爲でゞもあらうか――私共の情は解剖し難き美の不可思議な心持によつて彼女の方へと引かれてゆく。

テスマンが安心して預けたかの原稿のことをヘッダに訊ねた時、彼女は落着いて燒いて仕舞ひましたと答へる。かうなつては最早氣の毒な夫をも恐れて居ない。併し突然皮肉な心持が彼女を襲つて、全く目的なしに僞らせる。只人をからかふ爲に――僞る爲の僞、なぜならば僞ることは悪をなすと同樣の快感を彼女に與へる。彼女に取つては虚僞は何等の恥辱でもないかのやうに、手輕に、自然に、心配氣もなく僞る。彼女は混亂して、眞理の尺度を失ひ、最早自分で自分が分らなくなつて居るので無意識に僞る。此無意識の虚僞はかの猫屬の綺麗な、しかも危險な獸、豹に於て運動の無意識の美が自然であるやうに彼女に於ても自然なのだ。だから彼女は毒悪な、すれつからしの微笑を以て人々を嘲笑ふ。其悪意と機智の閃光は荒れ果た黒花崗石の紀念標の冷たい閃光を思はせる。泣くことを忘れてから久しくなる人は斯うした笑ひ方ばかりする。

ヘッダは自ら浮んで來る笑を抑へて、夫にレエボルグの原稿を燒いたのは貴方に對する愛の爲で、文明史の講座に於ける其危險な競爭者から見事に救つて上げやうと思つてゞあると云ふことを話す。鳥渡云ひ爭つたばかりすぐヘッダに說き伏せられるほど彼は自足心の強い、狹量な人である、そして自分のこの上もない友達で、一番危險な競爭者の破滅を豫



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

想しては譏笑的喜悅を包み切れず、忽ち人間の品位を全く失つて仕舞ふ。見よ此人を！萬人の尊敬を受け、人生を赤心から歡びもし愛しもして居るテスマンはこの時、人生を否定し、人類を憎む、罪ある虚僞のヘッダよりも道德的情操に闕して倘ほ、いやらしい人間だ。夫の破廉恥を肴にして、みづからの歡樂の酒杯を洋までも飮みほしたさにヘッダはテーアとレエボルグの創造物……全く二人の子供であるあの原稿を燒いてゐた時、懷妊の苦痛を始めて感じたと云ふことをテスマンに語る。是に於てテスマンは極度にたの本性を現す、この時私共は忽然として今日の俗流道德に於ける一切の主義や、一切の信仰を超越して此家庭的本能の中に潜在する動物的利己の深淵を考へさせられる。テスマンは父親になりかけの人として、又善良な一家の首長として、他人の子供は一人としてゐない、只自分の子供ばかりが住むやうに定められてゐると云ふことを眞に悅んでゐる。部分的道德の此善良な代表者の喜悅は實に生存競爭に於て勝利を得た男性の歡樂である。彼は此大悅樂を抑へきれないで、下女のベルサにさへ、ずつかり話さないではゐられない。そこでヘッダはあう嘲笑ふ力もない位、夫の凡庸な、取るに足らぬ性格に反抗した　夫をどんなに忌はしく思つてゐるかを隱さうともしない、そして直に生來の自若をさへ失つて仕舞ふ。彼女は絕望のあまり兩手を緊と握つて、

「あゝ、私は死んで仕舞ふ。私は死んで仕舞ふから！……



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

テスマン、「え？ ヘッダ。何に？ 何んだつて？」
ヘッダ（冷かに、氣を取直して、）「馬鹿々々しいわ、貴方。」
テスマン、「馬鹿な！ 俺があんまり喜んでゐるからだらう。ぢや、なんだ、ベルザに話さないでもよかつたと云ふんだね。」

併し此會話のお仕舞に來てやつとのこと彼は自分の態度がどんなに威嚴を缺いてゐたかを朧氣ながら氣付きかけた。そこで假に實際になれないまでもせめて男としての外見を取繕はねばならぬと云ふことを思ひ出す。彼は平常の無關心な風に返つて、氣の毒な破滅した友達の上を悲しんでゐる。
「いや、いや、神よ！ だがあの原稿は、あの原稿は！ お前の想像以上さ、實際氣の毒なゲルレルドにとつてはもつと恐ろしい打撃なんだ。」
判事ブラックかテスマンの家にレエボルグが自殺の報知を齎した時、ヘッダは之れを落付いて聞きとつて、しかもそんなに早くですか。」と云ふ。そして自殺の詳細をブラックに訊ねる。好奇心は彼女を壓倒する。自分を愛した彼の最後にどんな「美」があつたかききたい。
ブラック、「あの人は胸を撃つたのです。」



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダ、「胸ですか？」
ブラック「さうです申上げた通り。」
ヘッダ、「ぢや、顳顬てはないのですか。」
ブラック、「いゝや、奥さん、胸です。」
ヘッダ、「ああ、胸でもまあよかつたわ。」
ブラック、「何です？何をおつしやるんです？」
ヘッダ、（さけるやうに、）「いゝえ、なに、何でもありません。」

扨て、かの屢々惱まされた恐怖を脱し、彼女は救ひと云ふよりも殆ど歡びの嘆息を以て、「これで、とうと事が出來た！」と叫ぶ。

彼女と二人きりになつたとき、自分の喜悅を發表するに何等の恥辱をも感じなかつたテスマンはもう驚を隱さうともせずに叫ぶ。

「どうしたんだ、ヘッダ！そりや何のこつた？」
ヘッダ、「美しいことをした人があると云ふのです。」

それから後、ヘッダは不斷の冷靜と、抑へ勝にも似ず、判事と親しげに物語つて、殆ど夢中に叫ぶ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ああ、何て言ふ救ひでせう、人はまだ自由な貴いことを此の世の中で行へると云ふことを知るのは。それには何だか思ひがけない美の影が映しますわ。」

そしてあらゆる非難や、驚かされた頭の動搖や、質問に對する答として、彼女は此美に出逢つた悦樂に恍惚として、これだけのことしか答へない。

「私は只ゲルレルド、レエボルグが男らしかつたことばかり存じてゐます、あの人は御自分の意見に從つて生活したのですもの。あの人はお自分の意志と力とであの若さに人生の宴を見棄てたのです。こゝに美の影がさすのです。」

判事ブラックとヘッダと二人になつた時、彼はテーアに對する憐憫からレエボルグの自殺に關して全部事實をあかすことが出來なかつたのだと云ふことを話す。彼の死はヘッダの思つたやうに美しくはない、其自殺した所も彼自身の室ではなくて、歌女のダイアナの私室であつた。死ぬ前、彼は歌女を盜賊よばはりして盜んだ子供を出せと迫つた。そして彈丸は彼の胸でなく胃を貫いた。するとヘッダは嘔氣を催すやうな嫌惡を以て聲高に叫ぶ。

「ああ、どうしませう。それぢやあの人も駄目だつたわ！何故私の出遇ふものは呪はれでもしたやうに皆んな、皆んな、馬鹿々々しく、そして野鄙にばかりならなくちやならないのでせう。」

これこそ彼女が最後の絶望の叫びだ。ヘッダは美を信ずることを絶つと同時に生きること



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も絶たねばならない。

判事ブラックは彼女が此の事件の連累者であると云ふこと、ともかくも自分の思ひ次第で彼女を連累者にすることが出來ると云ふことを話す。警察官はレエボルグが自殺に使用した拳銃を見出した。そしてブラックはヘッダのものだと云ふことを知つてゐる。彼は裁判上の尋問に可能なると、「何故拳銃をレエボルグに與へたか」と云ふ問ひに對する返答の必要なることを彼女に說ききかせる。それから此老判事はマキャベリ式の術策をもつて拳銃の持主を知つてゐるのは自分一人で、それを警察に知らせやうと、秘密に保たうと自分の一存できまるのだと說いてヘッダを宥める。そこで彼女は自分で自分の係蹄に陷つたことに氣付く。判事は長い間、堪へ忍んで秘してゐた自分の愛に好き返事をしてくれるならば沈默を守ると云ふことを彼女に囁く。かくてヘッダガブラーは自分の罪の判決に對する恐怖と不面目に對する恐怖を遁れる爲に、此校猾な好色な老人につかまつてしまつた。

ヘッダ（彼を見詰めて）「それで私は貴方の自由になるものですね、してこれから私を罰しやうと、愛しやうと貴方の思ひ通りに出來るのね。」

ブラック（殆ど聞きとれぬ位に囁いて、）「可愛いヘッダさん、吃度です、私は決して自分の地位を亂用しやうとは思はんから。」

ヘッダ「それでも、私は矢張り貴方の自由になるものね、貴方の思通りになつて、もう自由



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ても何でもない、――私――自由ぢやない！（彼女は荒々しく起つて、）――いや、私はこんなことは我慢が出來ない、私は我慢が出來ない、死んだつて。」

それから彼女はなやましげに、しかもテーヤと一緒に黒くなつた書類の中からレエボルグの原稿を寄せ集めにかゝつてゐる夫を一寸冷笑して、扉口帷てしきられてゐる次ぎの室にゆく。やがてこれからピアノの荒々しい舞踏曲が聞える。人々は皆思はずぞつとするテスマンは親類の一人が死んだので、家は喪中だと云ふことを注意する。そしてレエボルグのことも思ひ出してくれと頼む。

ヘッダ（扉口帷の間から面を突出して）ああ、それから、ジユリア伯母さんのこともね、さあ、勿論ジユリア伯母さんのことも思出さなくては、それから其外の皆のことも。さあ、一寸御待ち下さい。もう二度と貴方がたの御邪魔はしませんから。」

（そして扉口帷を垂れる。）

室内ではさまで重要でもない話が續く。テスマンはいつもの馬鹿を擴げてゐる。自分は毎晩テーアの手傳をしてレエボルグの書物を纏めやうと思ふから、來て、ヘッダの相手をしてやつて呉れと判事ブラックに頼む。この提議をブラックは快諾する扉口帷の陰から、ヘッダははつきりした調子で戯談交りにそれに答へる。そしこ不意にやむ。と拳銃の爆發する音が聞える。皆吃驚して跳ね上る。人々は扉口帷を押し明けて、寢椅の上に横はるヘッダ

の屍を發見する彼女は顳顬を撃つて自殺した。判事ブラックは殆ど失神して椅子に身を沈めて、只もう喘ぎながらかう云つたばかり、「主よ我等を護り且憐れみ給へ！こんなことになるとは、どうしてまあ。

ヘッダカブラーは煩悶の瞬間に於ても生きてゐたやうに冷酷に、靜平に、人をさげすみ己れを惡みながら自殺した。ヘッダは自分に勇氣がない、だから死ぬと言ふ、彼女は「臆病者」とすら自分を呼ぶ。併しこの言葉は全く不適當である。彼女には意志もあり、力もあつた。只此意志に何の支柱もない爲め何事も決して爲し遂げられず。極めて些細な障碍にも打克つことが出來ない。出口を見附けないため力がはね返り、それみづからを破壞する。ヘッダの魂は信仰なしに生きることの出來ないものである。しかも其信仰は失はれた。若しヘッダが其の名に依つて生死することの出來る神を見出すならば、女丈夫ともなり、或は殉教者ともなつたてあらう。彼女は信仰上の要求を全然棄て去ることが出來ない、彼女は信仰なき空虚の苦痛に堪へることが出來ない。彼女は其時代の俗流の見解に自分を一致させることも出來ない。女は其信仰と信仰の要求に於て確に男子よりも執拗なものである、若し斯う云ふ性格であつて其内的勢力が動作に導かれなつかたならば、其時それは犯罪に導かれるのは止むを得ない。ヘッタは絕對否定の理論家達がまだ透入したことのない虛無主義の或點まで、總ての人間と總ての存在に對する憎惡、そして最後には靜かな意識的な自



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

滅にまで達してゐる。

へつた私共の前に其望みなき美を以て生きてゐた時のやうに矢張り欲情もなく、冷酷に死んでゐる。私共は彼女の殘忍に對して、其道德的虛無主義に對して、彼女を審かうと云ふ心持は全くない。只私共は今の如き生活を此上繼續することの不可能なるを思ふのだ。私共はかの最後の日光が空に消えて、星の一つも輝き出ない時、古き神々が死んでしかも新しい神々がまだ生れない時に現はれる、朧氣な薄明の中に生死すべく運命附けられた、それらの人間の悲劇を思ふ。――完――



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 二號豫告

ある夜（小説）　尾島菊子
鳥の讃美（飜譯）　野上八重子
柵（小説）　中野初子
短歌　茅野雅子
評論　與謝野晶子
題未定（小説）　小金井喜美子
題未定（小説）　岡田八千代子
題未定（戯曲）　木内錠子
沈默（散文詩飜譯）　ボオ
高原の秋（叙景文）　らいてう
俳句　白雨
其他未定のもの

## 青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り、各自天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本鄉區駒込林町九番地 物集方に置く。

第四條　本社は、社員賛助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に賛同したる女流文學者、將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす。本社の目的に賛同せられたる女流文壇の大家を賛助員とす。本社の目的に賛同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす。

第六條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし。

二、毎月一回社員の修養及び研究會を開くこと、但し賛助員の出席隨意たるべし。

三、毎年一回大會を開くこと、大會には賛助員客員を招待し、講話を請ふことあるべし。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會竝に大會の費用と社員、贊助員、客員への雜誌「青鞜」寄贈費とに當るものとす。

第八條　雜誌「青鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、贊助員、客員其の他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十二條　係員は再選することを得。

發起人（いろは順）

中野初子　保持研子
木內錠子　平塚明子
物集和子

名簿（いろは順）

贊助員

長谷川時雨　岡田八千代
加藤籌子　與謝野晶子
國木田治子　小金井喜美子
森しげ子

社員

岩野清子　戸澤はつ子
茅野雅子　尾島菊子
大村かよ子　大竹雅子
加藤みどり　神崎恒子
田原祐子　田村とし子
上田君子　野上八重子
山本龍子　阿久根俊子
荒木郁子　佐久間時子
水野仙子　杉本正生

## 豫告

青鞜社同人譯

# ポオ散文集詩

青鞜社出版



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 編輯室より

◎本誌青鞜は此所に初聲を放つて生れ出ました。これ一偏に本社の志望に御賛成下さつた賛助員及社員諸姉の御熱心なる御助力と其面目を全うせしむとの確き御決心とに依る事と深謝致します。

◎青鞜は女子のために、各自天賦の才能を十全に發揮せしむる爲に、自己を解放せむとする最終の目的のもとに相手携して、大に修養研究し、其結果を發表する機關としたいと云ふ事が本來の目的でありますから雜誌の爲の雜誌でなく、どこ迄も私共の爲の雜誌でありたいと存じます。

◎私共社員は預けられたる子として、之を世話するのではなく、我が子として健全なる成長を期し其の質の空しくならないことを希望いたします。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の獨立を鞏固にする必要を感じますので、多少に拘はらず基本金の中に有志諸姉の御寄附を御願ひ致したいと存じます。

◎社員は九月より毎月十五日迄に會費三十錢青鞜社宛に御送り下さい。

◎社員の修養兼研究會は九月二日（土曜日）の午後一時より青鞜社本部（物集氏宅）に於て開催いたしますから萬障御繰せの上御出席下さい。

◎社員の原稿は何時でも宜敷から青鞜社宛に御送下さい。

◎茅野雅子氏の短歌は本紙に掲載の筈でしたが御主人御病氣の爲次號にゆづります

◎社員のヘッタガブラ合評及中野木内の作物も頁數の都合上次號に廻します。

◎本社の賛助員國木田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅に於て本月より一六の日に松月古流生花、投入花及千家表流の茶の湯を松月古流家元藤城庵打瀬翁補助の下に指南せらるゝ由。

◎本社賛助員與謝野晶子、國木田治子の兩氏は特別に青鞜發展の爲め毎號御執筆下さる筈で御座います。

◎念の爲に云つて置きますが青鞜は Blue stocking の譯語す。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 雜誌規定

●毎月一回一日發行
●定價一册金貳拾五錢――郵稅壹錢五厘……
●原稿〆切期日は毎月十五日限とす。
●前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
●廣告料 (一頁)拾五圓 (半頁)八圓
●廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
●振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし
●郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十四年八月二十五日印刷
明治四十四年九月 一 日發行

禁 轉 載

編輯兼發行人 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社内 中野初
印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍
發行所 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社 (電話下谷三七七六) 振替東京口座壹壹六〇番
發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂 電話本局(一二四 三三八)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東京女學館教師 國分操子著

▲總紙數千五百頁

# (最新刊) 家庭日用 婦女寶鑑

## 驚く可き低價

國家の完備は家庭の完備に待つ、今や我國は一躍して世界一等國の列に入れり、從つて家庭の健全なる發達は急務中の急務なり、女子敎育家として令名高き國分操子女史玆に感ずる所あり、二十年來の實驗と蘊蓄とを發揮して此書を世に公にせらる

國體皇室、敎育、女禮式、家政、育兒、衞生、讀書（烈女傳才媛傳）、文章、和歌、書畵、音樂、手藝（和服裁縫編物刺繍造花袋物お細工物摘み細工）茶湯生花料理工藝等中等社會以上の女子に缺くべからざる事は一切網羅せざる無く猶坂正臣先生の和歌及び手紙の書き方をも加へたり、以て文明家庭必須の智識を得べく、以て女子の人格を養ふべく、實用にして而かも趣味あり、既婚と未婚とを問はず一般の女子に取りて、師となり友となり、實益を得るのみならず精神を慰藉するに足るべく、實に方今の家庭一日も缺くべからざる實用婦女百科辭典なり、殊に裝釘の如きも高尚美麗にして贈物とするに適し、婦女寶鑑の名に負かざる絶好の一大著述なり。

今日直ちに
申込ざれば
好機を逸す

和裝帙入極美麗全三册
用紙最上等改良半紙刷
正價五圓五拾錢挿畵五百圖

内容見本無料進呈

九月廿五日迄特價四圓（郵税內地金拾六錢）期日後は一切此の特價を以て販賣せず

東京日本橋角 大倉書店發行

振替口座東京二三八番
電話本局四一四番
電話本局二四〇四番


Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 萬年筆ありや

机の上にてもよし原稿は之に如くなしレターも妙なり海に山に折々の野遊びにペン書きの書葉書は殊に風流也オペラバッグの中に萬年筆なきは現代のアトモスフィヤを呼吸する姫とは云はれじ

## オリオンノート

金貳圓八拾錢
郵税金拾貳錢

自金六圓
至金六十五圓

## 丸善株式會社

東京●大阪●京都

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九月一日發行

# スバル

定價卅錢
郵税一錢五厘


## 小説

雁　鷗外
硝子問屋　堀花村
夢のさめぎわ　和辻哲郎
讀合せ　與謝野晶子
葬列　長島豊太郎
聖ばな　平出修
白湯　平野萬里

## 詩

詩報篇　北原白秋
夏の雨　水野葉舟
物のきれはし　山のわかもの
文三に　町のわかもの

## 歌

未定　肖三
未定　修
未定　茂子

むく鳥通信――裏畫――消息

## 附録

戯曲一篇　吉井勇
同　谷崎潤一郎
椿ちる頃　長谷川虎太郎



東京市神田區北神保町二　昴發行所　電話本局四二六四

☞本號の記事は殊に快活にして精彩あり

# 女子文壇

九月一日發行要目　第七年十一號　定價一冊十五錢　郵稅壹錢五厘

▼德富蘆花論　佐野天聲　中村春雨　日向きむ子　澤田撫松　叡嶽生　河井醉茗

▼洗禮……横瀨夜雨

▼蘆河畔の町……河井醉茗

▼月の夜語……坂東太郎

▼花摘み載する夏の夢……內藤千代子

▼開かれたる窓より……順子

▼黑い建物に囚はれたる女……覆面女

▼生れ甲斐なき貴族の血統……ゆみ子

▼日光雜行記……神近市子

▼海拔一萬二千尺……寺田よし子

▼大阪の婦人!!!　岩野泡鳴　樂井やよ　加藤みどり

▼田舍娘に金色夜叉を語る……松並紫花

▼幾りゆくもの……山田郁子

▼花ひくるしみ……本村[illegible]子

東京京橋大鋸町　女子文壇社出版　(振替口座東京[illegible])

[illegible]の各[illegible]へ御申込みを乞ふ取次所あり

戯曲集

# 午後三時

吉井勇氏著

再版

定價金壹圓
小包金八錢

著者の戯曲は文壇の絶品なり、本書曾て自由劇場に於て公演せられたる「夢介と僧と」「河内屋與兵衛」をはじめ十一篇美はしき一幕物を收む。眠れる文壇一服の注入劑。

抒情小曲集

# おもひで

北原白秋氏著

再版

定價九十錢
送費六錢

日本に於て公刊せられたる詩集の中、未だ本書の如きは曾てあらざりしとは各人の嘆稱して措かざる言なり、如何にその異色に富めるかは一本を得て知られよ

發行
東京市京橋區
南傳馬町三丁目
振替五六一四
東雲堂

若山牧水氏著

歌集

# 別離

定價金七拾五錢
送費金六錢

再版賣切……三版印刷中

活氣横溢新秋文壇の偉觀

純文藝雜誌

# 創作

一部貳拾錢
送費一錢

八月一日號發賣

# 心の花

第十五卷　九月號　第九號


波紋　高安月郊
未來の畏怖　沼波瓊音
狂日記　橘糸重子
泥渲　長尾素枝
二人　水上夕波
見張人　石榑千亦
清見潟より　木下利玄
旅路　小花清泉
夏の一日　佐々木信綱
夜　小柳清
眞夏の空氣　森田義郎
我　片山廣子
ますらをぶり　齋藤瀏
煎麥　印東昌綱
鹿兒島より　惠利武


心の花廣告〆切二十日限


定價一部十三錢税一錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢

東京日本橋區　竹柏會出版部　本石町一ノ一
振替東京四三〇〇番



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

●●九月の卷發行●●

# 新婦人

第一年第六號　定價 一册二十八錢 郵税二錢五厘　六册前金郵税共壹圓七拾錢

七月號八月號**賣切**となり高志に背くの罪責に**萬謝**の外なく候本月號は十分の刷増をなしたれば前一二號賣切の失態は切に御高恕あらん事を冀ふ

**睡鴿**　油繪極彩色……川村清雄筆

**香汗淋漓**　四美相擁して畫中嬌聲あり（石版極彩色）……鰭崎英朋筆

**臙脂の匂**　佳人浴を出て涼風肌を甜む……コロタイプ寫眞

英京に於ける伏見**若宮妃**殿下●二條公爵夫人●小笠原伯爵令嬢●大隈伯爵夫人●毛利子爵令嬢●北村巴女史●堀内すま子嬢●吉村千枝子嬢●東郷男爵令嬢太田書記官長令嬢**名倉けい**子女史●高田惣七氏令嬢●**宮中女官**尾村鐵子嬢●葉室孝子嬢●閨秀畫家**中山彩畝**女史●畫室裡の**上村松園**女史●閨秀音樂家**鈴木の**ぶ子嬢**田中勝代**嬢

**婦人百態**當選寫眞**披露**其他例により百花絢爛紅紫拉雜

讀むもの**一**虛榮心强き兩親の玩具（寺尾博士）巴里婦人の虛榮（山崎直三）貞操を蹂躪する男子の責任（平出辯護士）男心の解剖（北原末子）其他數十篇

**恐るべき同性の愛**……婦女通信社長　松本順造

**妾の良人たる者なきか**……小島ふみ子

附錄 **家庭日記** 九月分 温度表・晴雨表・獻立表 來客簿竝に九星舊暦附

新婦人見本 郵券卅錢五厘　賣捌所 全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 **聚精堂** 電話下谷一六七九 電話下谷四〇七二

SECTIONAL-BOOK CASE

# 組合せ本箱

It fits anyplace

●最新式最新形の木箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり

●多數の優れたるは特徴を有す、其重なるもの左の如し

▲藏書の増減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

▲室内の構造に應じて適宜に配置し得べし

▲書物を入れたるまゝ手軽に運搬し得べし

▲硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す

▲書物を分類するに便なり

▲形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

▲之れを要するに最善最良の本箱!!

定價

金二十六圓 桝製

金二十八圓 樺製

金三十圓 欅製

運賃荷造實費御自辨

構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

It grows with your library

●發賣元 東京市銀座大通新橋際 新橋堂書店 (振替東京二〇〇番 電話新橋一九九一番)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 村井弦齋著 | 増補註釋 食道樂 全一冊 | 春の巻 夏の巻 秋の巻 冬の巻 (合本) | 定價金二圓 郵税金十八錢 |
| 村井弦齋著 | 増補註釋 食道樂 續篇 | 春の巻 夏の巻 秋の巻 冬の巻 全四冊 | 各巻定價八十錢 郵税十二錢 |
| 村井弦齋著 | 増補訂正 臺所重寶記 全一冊 | | 定價金一圓 郵税金十二錢 |
| 赤堀峰吉 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 | 家庭應用 洋食五百種 全一冊 | | 定價金七十五錢 郵税金十二錢 |
| 赤堀吉松 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 | 家庭應用 惣菜五百種 全一冊 | | 定價金七十五錢 郵税金十二錢 |
| 故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 | 年中惣菜 全一冊 | | 定價金八十錢 郵税金十二錢 |
| 故久保田米僊選 | 毎日の惣菜案内 全一冊 | | 定價金二十錢 郵税金二錢 |
| 故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 | 茶の湯の心得 附茶席料理 全一冊 | | 定價金八十錢 郵税金六錢 |
| 赤堀吉松閲 奥村繁次郎著 | 名物諸國料理 全一冊 | | 定價金四十錢 郵税金六錢 |

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

# 歌舞伎

第百三十五號 (九月一日發行)

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊同二圓八十錢


戯曲「街の子」……鷗外口譯

梅玉に關する一書……前田芳柳
歌右工門の藝風……森ほのほ
文藝協會の試演……東儀鐵笛
私の役はヘルマ……土肥春曙
外國で見物した「人形の家」……中村春雨
「人形の家」の原作……高安月郊
秀調の「鳴戸」の型……よしを
暑中の小芝居……春浦生

金泉丑太郎日記……金泉丑太郎
歌右衛門襲名論……伊原青々園

加賀屋成駒屋系圖調……關根默庵
五代目歌右工門について……田村成義
八月の新脚本……花菱生
活動寫眞化せるシルレルの作……吉山旭光
劇談會(菊奴、虎外、黛水、元樓、醉月、駒子)
劇壇時事……一記者

附録脚本
刑罪……清見陸郎
母……掬月畦花


本郷區湯島切通坂町 萬朝報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八〇一六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大學病院々長佐藤博士題字
女子學院々長矢島楫子題歌
醫學博士二木謙三校
醫學士神村兼亮閲
醫學士桑原下學

大關和著

# 實地看護法

四版

正價 金七拾錢
豫約 金五拾錢

九月三十日迄に前金申込の御方に限り豫約金五拾錢にて差上可申候

發行所
東京市神田區裏猿樂町十九番地
大關看護婦會（電話本局二二五二番）

賣捌所
東京市本郷區春木町二丁目三番地
半田屋醫籍商店（電話下谷二、〇〇八）
東京市本郷區龍岡町三十四番地
吐鳳堂書店（電話下谷一、六七三）
東京市本郷區切通上二十七番地
南江堂書店（電話下谷一、三三〇）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

フリイドリッヒ・ニイチェ著

森鷗外氏序　生田長江氏譯

# ツァラトゥストラ

▲絶大なる好評を博し初版將に盡きんとす▼

東京市麹町區飯田町三丁目　新潮社

▲電話(番町)二、二二三番▼
▲振替(東京)一、七四二番▼

■總洋布製大卷稀有の美本■定價金貳圓參拾錢■小包料拾貳錢

トルストイと對立して十九世紀末の歐洲思想界に最も力ある波動を傳へた者はニイチエである。此の二人は人間生活其のもの丶偉大なる權化であり、同時に新時代新文明建設の最も偉大なる先驅者である。生田長江氏が永き努力の結果として、玆に譯出した「ツアラトウストラ」の一卷はニイチエの偉大なる精神生活の代表であると同時に、又以て十九世紀末思潮の代表的宣言である。ニイチエの思想は最近歐洲の思想界に驚くべき動力を與へたのは云ふ迄もないが、ゴーリキーの如きダヌンチオの如きを始として、ニイチエ思想に動かされて現れた近代作家も決して少くはない。ニイチエの思想は一面近代文藝の一大源泉を成して居る。わが國に於ても高山樗牛等を始めニイチエの思想を傳へやうと試みた人は少なくないが、而も多くはその精髓を撰んだものでない。ニイチエの思想は最近自然主義思潮によつて覺醒された我が思想界にして始めて傳ふべきである。生田氏が此翻譯は誠に時を得たものと云はねばならぬ。(早稻田文學評)

●譯文の樣式森嚴莊重を以て終始し其間潑溂たる清新の趣を加へて此種の神品を傳ふるに最も適へり出版界近來の好收穫と推奬するに憚らず(報知新聞評)

# 特別附錄ノラ號

ナヂヰモヴァ夫人の「ノラ」と松井須磨子女史の「ノラ」の型

# 詩と劇

九月一日發行
特價一部拾錢
郵稅壹錢五厘

## 本欄

◎惜（小說） 小川未明
◎わが寢室の暗より（詩） 人見東明
◎盆おどりの賑（戯曲） 仲木貞一
◎シヨウの理想と理想家（評論） 池田銀次郎譯
◎二階の窓（戯曲） 夏川靑鳥
◎チエホフの三人姉妹（戯曲） 秦豐吉譯
◎梵（戯曲） 佐藤惣之助
◎こゝろの秋（詩） 福田夕咲
◎劇作壇の新傾向（評論） 秋田雨雀

その他暮鳥芦風芳子完治おぼろ紫紘氏等十數篇あり

## 附錄

●「人形の家」について 坪內逍遙
●イブセン夫人の力 松居松葉
●近代劇の背景と氣分 土肥春曙
●光明ある道の開拓 東儀鐵笛
●露獨三女優の「ノラ」の型 中村春雨
●「ノラ」の性格研究 島村抱月

前號より本誌は短歌を揭載せり毎號短歌の寄稿をのぞむ

◎文藝協會私演劇場にては本月中旬イブセンの「人形の家」上場と決せり◎

◎本號は六名家のノラ觀を以て附錄と爲す「ノラ」は「人形の家」の女主人公なり◎

●怪奇と平凡とは吾れ等の願ふ所に非らず吾れ等はたゞ平凡の境に怪しく橫た●はる異常の姿を發見していみじき消息と新らしき藝術とを得んと願ふのみ●

小石川高田村雜司ヶ谷二四 發行 詩と劇社

東京神田神保町 發賣 東京堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すむ月や髭をたてたる蛬　其角

# 俳味

## 九月號要目


己が爲……（卷頭語）
俳諧一夕話……森山鳳羽
他の句……饗庭篁村
秋津蟲辨……（扇波）
我が蹈みたる道……星野麥人
私解芭蕉の發句……沼波瓊音
芝居國の人間……（道蛇樓主人）
大洗まで……鵜澤四丁
魚がしの俳味……小澤碧童
獄中の俳味……松本道別
平凡寺を訪ふ記……瑜多迦
露の曲玉……沼波瓊音
艶囮二則……中川柳外
通り雲……レモン法師
挿畫……小杉未醒
附錄
伊勢紀行……（去來）



每月一日一回發行

定價
一部　金拾貳錢
郵稅　壹錢
半年分前金　郵稅共　金六拾八錢
一年分前金　郵稅共　壹圓參拾貳錢

發行所
東京市本郷西片町拾番地
俳味社
振替口座東京參四參四番

小兒科一般

一嬰兒の健康診斷及哺育法

一嬰兒の諸病及小兒皮膚病

ドクトル メヂチーネ 長井岩雄

東京日本橋區數寄屋町（吳服橋外）

小兒科養生院

電話本局百八十番

# 最良髪油

# みやけ油

登録商標

東京人形町通

木村三宅堂

## 家庭重寶

專賣特許一一二九八

## 粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

## 木村三宅堂

電話浪花六二〇 振替口座八七五一番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第一号
明治四十四年九月一日発行（毎月一回一日発行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER